

北齊臨淮王像碑の試譯と初歩的考察

倉 本 尚 徳

はじめに

中國の北朝時代は、それ以前の時代に比べ、造像銘や墓誌などの石刻が急増した時代である。近年、中國において



圖一 臨淮王像碑碑陽

典據：文物出版社（編）『文物』1999-9.71 頁

石刻資料集の出版が相次いでおり、研究の環境が整ってきたこともあり、石刻に對する關心が高まりをみせている。二〇〇九年五月に開催された第五四回國際東方學者會議においては、明治大學氣賀澤保規氏の主催により、「中國北朝後期・隋唐期の山東佛教石刻と東アジア」と題したシンポジウムが開かれ、考古、美術史、佛教、東洋史學の各分野の専門家が一堂に會し

北齊臨淮王像碑の試譯と初歩的考察

た。参加者が多くなり會場が急遽變更になるほど大盛況であったことは記憶に新しい。

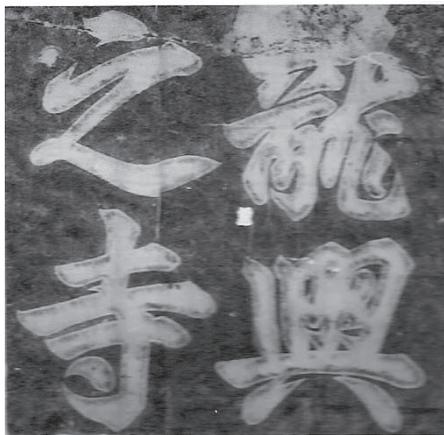
このシンポジウムにおいても複数の報告者によって言及された臨淮王像碑（圖一）は、北齊武平四年（五七三）の紀年を有し、高さ四米を越える巨大な造像碑で、北朝時代山東地方を代表する石刻の一つであると言えよう。臨淮王とは東魏王朝の實質的建國者である高歡の妻の弟の婁昭の次子、臨淮郡王青州刺史の婁定遠を指す。婁定遠が無量壽三尊像を建造したことを記念して建てられたのがこの碑である。

臨淮王像碑は古くよりその名を知られ、『金石錄』を始めとして、歴代金石著録にも収録されており、中國淨土教史研究においても、無量壽・觀音・大勢至の無量壽三尊名とともに「彌陀」という名も見えることではしばしば引用されてきた。⁽²⁾そして、一九九六年、大量の精美な北朝時代の佛像が出土したのが、青州龍興寺址、すなわちこの碑⁽³⁾と建てられていた寺院だったということもあり、この碑は美術史の方面でも注目されることになったのである。

しかし、碑文の一部分が断片的に引用されることはあるものの、難解で非常に長文であるせいもあり、碑文全體を解釋し、その論旨を明らかにした研究はいまだにない状況にある。本稿は、この碑に關する基礎的資料を提示し、全體の試譯を作成し、この碑の有する佛教史學的價值について、ごく初歩的な考察を加えるものである。今後の研究にいささかなりとも資することがあれば幸いである。

一．碑の概要

臨淮王像碑は、碑文中に「南陽寺は乃ち正東の甲寺なり。……遂に此の所に於いて、爰に佛事を營み、……」と



圖二 碑陰「龍興之寺」

典據：顔娟英（主編）『北朝佛教石刻拓片百品』
中央研究院歷史語言研究所，2008年，258頁

見えるように、當時青州第一の寺であった南陽寺（のち龍興寺と改名）に建てられた。この寺の沿革に關しては、宿白氏が史料を提示しつつ詳論している⁽⁴⁾。氏の考證によれば、南陽寺は、陽水を挾んで北に位置する東陽城に對し、陽水の南側の南郭の西北部にあたる場所に存在した。碑文に「既に左は闌閭に通じ、亦た右は澗谷に憑る。前みては崖磬を望み、却きては泚瀨に隣す」とあるように、この寺の東側は市街であり、西側と北側は陽水の流れる溪谷であった。寺域としては、現在の青州市博物館の南東側、東は洵米澗、南は獅子口に達する、廣大な領域を占めていた。

南陽寺は、その後、幾たびかの寺名變更を経て、唐の開元十八年（七三〇）には龍興寺にその名を變えた。特に、盛唐時代、この寺は非常に繁榮し、壯大な伽藍を構えていたという。龍興寺は、明の洪武帝の時代に廢され、碑は城北の彌陀寺に移された。その後、清乾隆四十七年（一七八二）に、大風雨によつて、このとき既に上下に斷裂していた碑を縛つていた鐵束がはずれ、倒壊しかけたので修繕し、滾水橋北の文昌祠に移された。清末には文昌祠が廢され田間に建てつていたが、一九七九年秋に青州博物館によつて偶園に移され現在に至つてゐる。

この碑は高さ四四四、幅一六〇、厚さ一九厘米の螭首碑であり（圖一）、碑首の中央には圭形の碑額があり、「司空公青／州刺史臨／淮王像碑」と陽刻篆書で刻されている。雙龍が後肢の爪で碑額の尖端部において寶珠を捧げ持ち、寶珠の上には鳳凰のような

鳥がとまっているが『碑刻造像』⁽⁵⁾ではこの鳥を朱雀としている。碑額の兩側には小佛龕があり、向かって右側の龕が倚坐佛像、左側が交脚坐像である。これらの坐勢はこの時代にあつてはともに彌勒とされるものが多い。碑陽には一行五八字×二九行、全一六三五字が刻まれていたが、現存するのは一五〇〇字程度である。ただし拓本の缺字を歴代著録によつて補えば、不明であるのは唯だ一文字だけである。碑陰には、「龍興之寺」と大書され(圖二)、これは、唐代の李邕が揮毫した龍興寺の寺額を金の皇統六年(一一四六)に摹刻したものである。左方には濟南孫愨の題跋があつたが既に磨滅したといふ。

この碑について、最初に全文を録したのは『嘉靖山東通志』(以下『山東』と略)卷二〇であり、『嘉靖青州府志』(以下『青州』と略)卷一一、『金石萃編』(以下『萃』と略)卷三五、『山左金石志』(以下『山左』と略)卷一〇、『益都金石記』(以下『益記』と略)卷一にも収録されている。『山東』や『青州』の録文はあまり正確ではない。近代の移録としては、『支那美術史彫塑篇』(以下『大村』と略)⁽⁶⁾三四九―三五三頁、『支那佛教史蹟』(以下『佛蹟と略』)四・一四〇―一四二頁、『魯迅輯校石刻手稿』(以下『魯』と略)⁽⁸⁾第二帙第四冊八五一―八五八頁、『北朝佛教石刻拓片百品』(以下『百品』と略)⁽⁹⁾、さらに部分的に注釋も加えた『漢魏六朝碑刻校注』(以下『校注』と略)⁽¹⁰⁾第一〇冊一五一―一九頁などがあり、いずれも録文はかなり正確であり、参照價値は高い。

拓本寫眞としては、既述の書に収録されたもの以外に、藤原楚水『譯註語石』上⁽¹¹⁾五六二―五六六頁、『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』(以下『拓』と略)⁽¹²⁾八卷四九頁、さらに京都大學人文科學研究所藏拓の畫像ファイル(ファイルナンバーNAN0646X)などが挙げられる。

本稿では『百品』の拓本寫眞が比較的鮮明であるのでこれに主に依據し、上に掲げた他の拓本寫眞や著録を適宜參

照しつつ録文を作成した。異體字などは基本的にいわゆる正字に改めたが例外もある。拓本寫眞では缺損しているが、著録によって補うことの出来る文字はゴシック太字で表示し、他と區別した。先に録文全體を掲げ、訓讀と現代語譯と語釋は筆者の獨斷で内容に基づき段落分けし、タイトルを付して示す。各著録の録文の文字の異同については網羅的な比較検討は行わず、筆者と異なるもので注意すべきもののみ語釋において示した。

二、録文と譯注

録文

【碑額】

司空公青

州刺史臨

淮王像碑

【碑陽】

1 大齊武平四年歲次癸巳六月乙未朔廿七日辛酉建。

2 竊以、萬川朝海、大海終自爲陵。五雲出山、名山久而爲礪。謂天謂地、悉有時而崩毀。日乎月乎、竝無救於盈缺。縱陰陽莫測、夷夏率從、奮六轡而遠馳、蜚

3 九翼而高視、安知衆苦鱗萃、五哀波屬、儻與豪風競馳、俄將葉露俱盡。假令餌瓊髓、飛玉觴、燭日月、驅風

北齊臨淮王像碑の試譯と初歩的考察

- 雨、車騎如雷、乘空幸延年之第、旌旗遏景、浮虛
- 4 造子登之岳、陸生仙賦、僅舉一隅、張子真篇、唯明片分、皆亦馳於廢興之術、環於起滅之遠、侔彝華之驟殞、逼藤根之易絕。茲焉以外衆生何限、墨竭塵
- 5 盡、所未能量、竝驚踰接劍、險過累卵、電謝慮遽、泡慙儻忽。然則莫知其去、罕見其來、災風掃而更安、毒火焚而弗爛者、而不具八解脫、備六神通、鬱萬善
- 6 而扶疏、超百非而迴越、又何堪至於此也。若夫前聖後聖、天之又天、八恒之大醫王、十方之大仙主、或與定光同字、數極五千、或共弗沙等名、算盈三億。
- 7 雖應現年別、王領處乖、而妙力神光、規重矩疊。竝慈雲廣庇、善雨周覃。皎智日於重昏、燃慧燈於積暗。悲河鼓浪、六度之船併浮、熾宅揚煙、三乘之轍俱
- 8 轉。威靈之大、未易等級、變化之奇、寔難思議。層山納於芥子、仍自嶽岑、巨海入於毛穴、無妨浩淼。伏闡世之狂象、弭迦葉之毒龍、波旬覩而喪魂、梵志望
- 9 而辟魄。誠最尊最勝、莫高於法王。但非滅示滅、還失於慈父。於是鞞巖徒朗、植木終難。虛瞻白鶴之林、誰逢青雀之樹。翻令水言功德、永遏波濤、山名智
- 10 慧、遂潛峯峿。其能闡清化於將淪、振玄風於以墜、千年一有、非我而誰。使持節都督青州諸軍事驃騎大將軍青州刺史司空公寧都縣開國公高城縣
- 11 開國公昌國侯臨淮王婁公、孕彩中岳、摘精大水。龍章外動、豹氣傍飛。妙質則罔若珠明、瓌姿則朗猶玉瑩。負將相之奇器、懷社稷之高節。經文大德、紛

- 12 綸而備九、佩武殊功、雜踏而兼七。拂羽則搏風歷漢、抗足則超塵絕影、知管樂之爲小、識元愷之非大。鼓盪於天地之間、疏散於雲霞之表。排帝門而
- 13 矯首、沐皇慈以濯鱗。裂壤分珪、旦夕兼委、儀台服袞、造次以之。始映金蟬、鄙丁劉於漢日、暫栖鷓沼、蔑陳張於晉京。履每曳於南宮、職類關於北斗、迄
- 14 文昌而鳳跄、入鉤陳而虎盼。穆陵而北、負海而西、分屬虛危、音中角羽、連枉與密雲爭暗、旨酒共漉流競深。其鳩曾樂於茲所、尚父經封於此域。孔融之
- 15 見圍也、史慈冒難於都昌。袁譚之被攻焉、王脩赴禍於高密。聳丹山而峭立、迴紫城而鬱連。敗燕之勢未淪、巨漢之容尚在。是爲名岳、實冠諸蕃。秉刺於
- 16 茲、義歸親重。故能整旗蓋而辭閭闔、節筋鏡而下營丘。帷始闢而鄉移、冕纓彰而俗變。三春未動、別鼓春廳、九冬不作、自懸冬景。齊之以禮、導之以德。寬
- 17 大居先、威嚴次後。哀恤孤寡、誅鋤豪黠。徭役既擯、奸軌斯逃。持廉作寶、日弗視於金玉。匪財而富、身詎染於脂膏。遂令神雀集苑、災蝗避域。孝子與順孫
- 18 藜秀、節妻共義士相望。凡如此流、抑亦衆夥、不能備序、敢復略言。假細侯之行美稷、孟堅之案交趾、子虞稱最於區中、梁道作法於寰內、持來況我、無不
- 19 退飛。兼憤然興嘆、類羊公之陟峴、喟然垂感、切孔父之臨川。悲此有之難拘、慨茲生之易滅。常住之因遂植、彌陀之願仍起。故海岱之間、凡諸福地、罔不
- 20 傾蓋、悉展懇誠。於是民吏承規、事難捨而能捨、表裏蒙化、業難行而遂行。何異草逐風低、水從壺變。僧寶因

- 而再盛、佛日由其更懸。南陽寺者、乃正東之
21 甲寺也。既左通闌闔、亦右憑澗谷、前望崖磬、却隣泚瀾。層圖邁於湧塔、祕宇齊於化宮。足使須達羨其經啓、
延壽韜其賦頌。感致之極、莫與爭先。果屈輪
22 輿、類脩禮謁。香甫燃而霧作、花劣飛而霰下。遂於此所、爰營佛事、制无量壽像一區、高三丈九尺、并造觀世
音大勢至二大士而俠侍焉。庶國道與華胥
23 競高、帝業共虛空比壯、含靈賦命、盡植優花。乃具以三心、成之百寶。白銀之麗咸寫、紫金之妙畢圖。豪如
五嶺之旋、即之便觀。目似四溟之潔、驗之猶
24 在。毗楞寶冠、帶左而馳耀、鉢摩肉髻、據右而飛光。望舒之迴處星中、須彌之孤映海外、僅堪方此、何以尚
茲。時長史解叔寶、司馬李元驥、別駕宇文幼鸞、
25 治中崔文惠、及諸僚佐等、竝滄□下筵、贊成高義、狀鱗波之遞得、劇風毛之互舉。恐炎涼遽徙、縑竹難存、便
勒美於貞石、庶永永於乾坤。迺作銘曰、
26 駛河難測、暗海無邊、津梁莫起、燈燭誰燃。念念不住、苦苦相沿、生猶電轉、滅甚雲旋。昔往今來、靈仙非
一、騎龍駕虎、排霄蔽日。朝登玉樓、夜遊瓊室、終歸
27 聚散、安知假實。常住無我、寄在天尊、業苞眞俗、事斷名言。惚峯虧構、慧浦疏源、神儀或掩、像法彌敦。亦
有人英、翹然孤上、似竹千仞、如松百丈。帶鉉之蕃、
28 仁深譽仰、一方饒益、千城注想。覺花常吐、愍葉恒春、誓將調御、寧求轉輪。爰脩佛寶、於此東秦、項光仍
射、眉相還陳。雙樹結影、三蓮接耀、五道光含、十方

29 輝眺。果名奇特、是稱衆妙、樂地在茲、焉須遠召。福之所暨、寧專爲我、俾斯含識、俱圓妙果。行值嵐風、方逢劫火、空餘勝蹟、無騫無墮。

訓讀と譯注

【①一〜五行目 この世は無常である】

【訓讀】

大齊武平四年、歳は癸巳に次る六月乙未朔廿七日辛酉に建つ。

竊かに以えらく、萬川海に朝するも、大海終に自づから陵と爲る。五雲（一）山を出づるも、名山久しくして礪と爲る。天と謂い地と謂い（二）、悉く時有りて崩毀す。日や月や（三）、竝びに盈缺を救う無し。縦い陰陽の測る莫く（四）、夷夏率從し、六轡（五）を奮いて遠く馳せ、九翼（六）を蜚ばし高く視るとも、安んぞ衆苦鱗のごとく萃まり（七）、五衰（八）波のごとく屬なり、儼かに豪風と競い馳せ、俄かに葉露と俱に盡くる（九）を知らんや。假令瓊髓を餌らい（一〇）、玉觴を飛ばし（一一）、日月を燭とし（一二）、風雨を驅り、車騎雷の如く（一三）、空に乗じ延年の第（一四）に幸し、旌旗景を遏め（一五）、浮虚して子登の岳（一六）に造るとも、陸生の仙賦（一七）、僅かに一隅を擧げ（一八）、張子の眞篇（一九）、唯だ片分を明かすのみにして、皆な亦た廢興の術を馳せ（二〇）、起滅の迹を環り（二一）、薜華（二二）の驟かに殞つるに倅しく、藤根の絶え易きに逼し。茲焉より以外の衆生何ぞ限らん、墨竭き塵盡くるも、未だ量る能わざる所（二三）、竝びに驚は劍を接するを驗え、險は卵を累ぬる（二四）を過ぐ、電は恩遽たるを謝し、

泡は儼忽たるを慙ず (二五)。

【現代語譯】

大齊武平四年、歳星が癸巳に次る六月乙未朔、廿七日辛酉に建てた。

おもうに、あらゆる川が海に注ぐが、大海も最後には自然に陵となる。五色の雲は山から出現するが、名山も長い時間がたてば粗石となる。天も地もみないつかは崩壊する。日や月もともに満ち缺けをとどまらせることができな。たとえ陰陽の變化が捉え難く、夷狄も中夏もつきしたが、車馬を御し遠くに馳せ、九翼をはばたかせ高所よりみるとしても、どうして多くの苦が鱗のように多く集まり、天が衰える五つの様相が波の如くに連なり、瞬く間に強風と競って過ぎ去り、たちまち葉の露とともに盡きてしまうことを知っていようか。たとえ瓊髓を喰らい、玉杯を飛ぶようにくみかわし、日月を燭とし、風雨を驅りたて、車騎が雷の如く轟音をとどろかせ、空を飛んで延年の宮第に行幸し、旌旗が太陽の光をささぎるほど多くつらなり、浮遊して子登が登った山に至ったとしても、陸生の仙賦がただ一つのことを述べたに過ぎず、張子の眞篇がただ一面のみを明らかにするようなだけで、みな興亡盛衰の道を馳せ、生滅の道をめぐるのであり、むくげの花がすぐさま落ちてしまうのに等しく、藤根の絶えやすいのに近い。これら以外の衆生はどうしてその數に限りがあるか、墨や塵がつきてもその數をはかることができな。その驚きは劍を接することを越えており、苦難は卵をかさねることを越えている。稻光ですらその慌ただしさに謝し、泡ですらその瞬間に消えることに恥じている。

【語釋】

- (一) 【五雲】 青、白、赤、黒、黃五種の色の雲。古人がその色を見て吉凶を占った。(例) 『周禮』春官 保章氏「以五雲之物、辨吉凶、水旱降、豐荒之祲象」。
- (二) 【謂天謂地】 (例) 『毛詩』小雅 節南山之什「謂天蓋高、不敢不局。謂地蓋厚、不敢不踣」。
- (三) 【日乎月乎】 (例) 『毛詩』國風 邶風 日月「日居月諸、照臨下土」注「日乎月乎、照臨之也」。
- (四) 【陰陽莫測】 (出典) 『周易』繫辭上「陰陽不測之謂神」。
- (五) 【六轡】 車を引く四頭の馬につけた六本の手綱。(出典) 『毛詩』秦風 小戎「四牡孔阜、六轡在手」。
- (六) 【九翼】 (例) 『辯正論』卷一原注所引『河圖括地象』「天地初立、有天皇氏。澹泊自然、與太極同道。身佩九翼、以木德王。無所施爲、自然而化」[T32:490b]。『廣博物志』卷九「天皇九翼、提名旋復。『河圖括地象』。九翼、輔翼者九人也。提名、策名也。旋復、言其變化」。
- (七) 【鱗萃】 鱗集。群がり集まる。(例) 『文選』卷七 司馬相如 子虛賦「珍怪鳥獸、萬端鱗萃」。
- (八) 【五衰】 天人が死ぬ前に現れる五つの様相。(例) 『涅槃經』梵行品「王今且聽。釋提桓因命將欲終、有五相現。一者衣裳垢膩。二者頭上花萎。三者身體臭穢。四者腋下汗出。五者不樂本座」[T12:478a]。
- (九) 【俄將葉露俱盡】 「將」は、こゝでは「與」と同じ働き。
- (一〇) 【餌瓊髓】 「瓊髓」は玉の精髓の意。『石倉歷代詩選』卷五〇一 明詩次集一三五 黃省曾 壽蔡霞山方伯司勳乃尊也に「白石煮瓊髓、黃精斛稻糧」とある。類語として「瓊蕊」がある。(例) 『文選』卷二 張衡 西京賦「屑瓊蕊以朝餐、必性命之可度」。李周翰注「瓊蕊、玉英也」。『李太白集注』卷三六「夕餌瓊蕊、晨漱

玉泉」。

(一一)【飛玉觴】「玉觴」は玉杯・酒杯。「飛觴」は、飛ぶように速く杯をくみかわす意。(例)『文選』卷五 左思 吳都賦「里讌巷飲、飛觴舉白」。劉良注「飛觴、行觴疾如飛也」。『太平廣記』卷三〇九 神部一九 蔣琛「於是朱紘雅張、清管徐奏、酌瑤觥、飛玉觴、陸海珍珠、靡不臻極」。

(一二)【燭日月】(例)『樂府詩集』卷七八 步虛詩「懸居燭日月、天步役風煙」。『文苑英華』卷二九所引 唐 楊敬之 華山賦「燭日月、居乾坤」。

(一三)【車騎如雷】車騎が多く連なる威容を雷鳴に喩える。(例)『文選』卷八 司馬相如 上林賦「車騎雷起、殷天動地」。李善注「雷、古雷字」。

(一四)【延年之第】不詳。延年長壽の宮第の意味か。ただし「子登之岳」との對句を考えると「延年」は人の字か。

(一五)【旌旗過景】日光が隠れるほど旗が多く連なるという意味。行列の威容をいう。『文選』卷一五 張衡 思玄賦には「氛旄浴以天旋兮、蜺旌飄以飛颺」とある。

(一六)【子登之岳】「子登」は王褒の字。『雲笈七籤』卷一〇六 清虛真人王君內傳「華存師清虛真人王君、諱褒、字子登、范陽襄平人也。安國侯七世之孫、君以漢元帝建昭三年九月二十七日誕焉」(前漢に范陽郡なし。臨淮郡と遼東郡に襄平縣(または侯國)あり)。『雲笈七籤』卷四 上清經述「太極真人王總眞復降以上清經三十一卷、付子登、并將子登遊五嶽、觀名山、備受上法」。『太平御覽』卷六六一所引『尚書帝驗期』「王母之國在西荒。凡得道授書者、皆朝王母於崑崙之闕。王褒、字子登、齋戒三月、王母授以瓊花寶曜七晨素經」。

(二七) 【陸生仙賦】「陸生」は西晉の陸機のことか。陸機は『晉書』卷五四に立傳。著に『列仙賦』あり。『藝文類聚』卷七八などに所收。

(二八) 【僅舉一隅】(出典)『論語』述而「子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅而示之、不以三隅反、則吾不復也」。

(二九) 【張子真篇】不詳。あるいは後漢の張衡の『思玄賦』(『文選』卷一五所收)のことか。ただし陸機より時代が前なので順序的に適當ではない。

(一〇〇) 【馳廢興之術】「術」は道の意。治亂廢興の道を馳せる。(例)『孟子』離婁上「國之所以廢興存亡者亦然」。

(一一) 【環起滅之達】「起滅」は佛教語。因縁が和合して生じ離散して滅する。(例)『後漢書』列傳七八 西域傳論「精靈起滅、因報相尋」。李賢注「精靈起滅謂生死輪迴無窮已」。「達」は四方に通じた道。

(一二) 【薜華】木槿(むくげ)の花。朝顔。朝開き、夕暮にしほむ。

(一三) 【墨竭塵盡、所未能量】(出典)『妙法蓮華經』化城喻品「如人以力磨、三千大千土、盡此諸地種、皆悉以爲墨。過於千國土、乃下一塵點、如是展轉點、盡此諸塵墨。如是諸國土、點與不點等、復盡抹爲塵、一塵爲一劫。此諸微塵數、其劫復過是、彼佛滅度來、如是無量劫」[P:22b]。

(二四) 【累卵】(出典)『韓非子』十過「故曹、小國也、而迫於晉楚之間、其君之危、猶累卵也」。

(二五) 【電謝恩遽、泡慙儻忽】「恩遽」は、倉卒、あわてる、あわたたしいさま、いそぐこと。「儻忽」ははやいさま。電と泡を無常の譬喩として用いる例として、『六度集經』卷八「人命譬若天雨墮水、泡起即滅。命之流疾有甚於泡。人命譬若雷電恍惚、須臾即滅。命之流疾有甚雷電」[T3:50a]などが挙げられる。

【②五〇九行目 佛の偉大さ】

【訓讀】

然れば則ち其の去るを知る莫く、其の來るを見ること罕にして（二二六）、災風（二二七）掃いて更に安んじ、毒火（二二八）焚きて爛えざる者、八解脱（二二九）を具し、六神通（三〇〇）を備え、萬善を齎み扶疏（三二一）にして、百非（三三二）を超え廻かに越えざれば、又た何ぞ此に至るに堪えんや。夫の前聖後聖（三三三）、天の又た天（三四）、八恒の大醫王（三五）、十方の大仙主（三六）の若きは、或いは定光と字を同じくすること、數五千を極め（三七）、或いは弗沙と共に名を等しくすること、算三億に盈つ（三八）。應現（三九）の年別にして、王領の處乖うと雖も、妙力神光、規重なり矩疊なるがごとし（四〇）。竝びに慈雲廣く庇い（四一）、善雨周ねく覃ぶ（四二）。智日を重昏に咬かし（四三）、慧燈を積暗に燃やす（四四）。悲河浪を鼓てば、六度の船（四五）併びに浮かび、熾宅煙を揚ぐれば、三乘の轍俱に轉ず（四六）。威力の大なること、未だ等級を易えず、變化の奇なること、寔に思議し難し。層山芥子に納むるも（四七）、仍自欽岑たり（四八）、巨海毛穴に入るも（四九）、浩淼たる（五〇）を妨ぐる無し。閻世の狂象を伏し（五一）、迦葉の毒龍を弭むること（五二）、波旬（五三）覩て魂を喪い、梵志（五四）は望みて魄を辟く。誠に最尊最勝なること法王より高きは莫し（五五）。但だ滅に非ざるに滅を示すは（五六）、還つて慈父（五七）たるを失す。

【現代語譯】

そうであれば、その去來を知ることができず、災風が吹いても安逸であり、毒火に焼かれても燃えないという境地には、八解脱や六神通をそなえ、あらゆる善を積んで成長し、百非をはるかに越えるようであれば、どうしていた

ることができようか。かの前聖、後聖、天中天、八恒河沙もの大醫王、十方の大仙主である佛は、同じく定光と號する者が五千にも達し、弗沙という名の者が三億にも達した。それぞれ世に現れる年代が異なり、王の領する地も異なるが、そのすばらしい力や不思議な光は、規矩がびったり合うごとく同じである。みな慈悲の雲があまねく覆い、善の雨があまねく及ぶ。智慧の太陽を黒闇に輝かし、智慧の燈を暗がり燃やす。大悲の河が波をおこせば、六波羅蜜の船はみな浮かび、炎に包まれた家宅が煙を揚げれば、三乗の車はともに動き出す。その靈妙な威力の大きさは等級を一にしてみな同じであり、變化の妙もまことに測り難いものである。幾重に重なった山を芥子粒の中に納めても山の高さはそのままであり、巨海を毛穴に入れても、海の廣大なさまは變わらない。佛は阿闍世王の狂象を降伏し、迦葉の毒龍を調伏したので、阿闍世はそれを見て肝を冷やし、迦葉は恐懼した。まことに最も尊くすぐれていること佛にまさるものはない。ただ本當は滅していないのに寂滅の相（涅槃）を示したのはかえって慈父という稱號にもとるものである。

【語釋】

(二六) 【莫知其去、罕見其來】(例) 『廣弘明集』卷二九 江淹(四四四～五〇五) 無爲論「吾聞大人降迹、廣樹慈悲、破生死之樊籠、登涅槃之彼岸、闢三乘以誘物、去一相以歸眞。有智者不見其去來、有心者莫知其終始」[T52:343a]。

(二七) 【災風】(例) 『妙法蓮華經』普門品偈「無垢清淨光、慧日破諸闇、能伏災風火、普明照世間」[T5:311a]。

(二八) 【毒火】(例) 曇無讖譯『佛所行讚』卷四 瓶沙王諸弟子品「時惡龍見佛、瞋恚縱毒火、舉室洞熾然、而不

觸佛身。舍盡、火自滅、世尊猶安坐」[T4:31b]。

(二九)【八解脫】三界の煩惱を捨ててその繫縛から解脫する八種の禪定。八背捨。(例)『長阿含經』卷一〇「阿難、復有八解脫。云何八。色觀色、初解脫。內無色想、觀外色、二解脫。淨解脫、三解脫。度色想、滅有對想、不念雜想、住空處、四解脫。度空處、住識處、五解脫。度識處、住不用處、六解脫。度不用處、住有想無想處、七解脫。滅盡定、八解脫。阿難、諸比丘於此八解脫、逆順遊行、入出自在、如是比丘得俱解脫」[T1:62b]。

(三〇)【六神通】人知を超えた次の六種の自由自在な能力。(例)『長阿含經』卷九「云何六證法。謂六神通。一者神足通證。二者天耳通證。三者知他心通證。四者宿命通證。五者天眼通證。六者漏盡通證」[T1:54b]。

(三一)【扶疏】扶疏。枝葉の繁茂するさま。また繁盛するさま。(例)『呂氏春秋』任地「樹肥無使扶疏、樹燒不欲專生而族居。肥而扶疏則多稔、燒而專居則多死」。

(三二)【百非】「百」は概数。「非」とは非有非無と非認するを言う。(例)吉藏『法華義疏』序品「佛法豎不得其底。謂絕四句爲深。橫不見其邊。越百非稱遠。又心行滅故爲深。言語斷故爲遠。正是根本法輪義如此也」[T34:479b]。

(三三)【前聖後聖】(出典)『孟子』離婁下「得志行乎中國、若合符節、先聖後聖、其揆一也」。(例)『孔叢子』答問「韓氏未必非、孔子未必得也。吾今而後乃知聖人無世不有、前聖後聖法制固不一也」。智顓『維摩經玄疏』卷五「又云、前聖後聖莫不經此悉檀所說之教而得成道」[T38:548a]。

(三四)【天之又天】佛號の一つである「天中天」のことか。『六度集經』卷一「今果得佛、號天中天、爲三界雄」

[T3:2b]。

(三五) 【八恒之大醫王】八恒河沙もの多くの諸佛。(例)『涅槃經』如來性品「若有衆生於八恒河沙等佛所發菩提心、然後乃能於惡世中不謗是法」[T12:398c-399a]。竺法護譯『普曜經』卷六 諸天賀佛成道品「於是欲行天王如見如來坐於樹下、神通以達、所願具足、降魔怨敵、豎大幢幡、無極大仁、爲大醫王、療衆疾患」[T3:523a]。

(三六) 【十方之大仙主】(例) 闍那崛多譯『諸法本無經』卷三「所有十方佛世尊、住世作利大仙主」[T15:773b]。

(三七) 【與定光同字、數極五千】『百品』では「字」を「字」に作る。「五千」は「八千」の誤りか。(出典)『佛藏經』淨見品「舍利弗、我念過世得值八千佛、皆號定光」[T15:797a]。

(三八) 【共弗沙等名、算盈三億】(出典)『佛藏經』淨見品「舍利弗、我念過世值三億佛、皆號弗沙」[T15:797b]。

(三九) 【應現】佛などが衆生の機縁に應じてこの世に現れること。(例)『大方便佛報恩經』親近品「世尊應現世間、引接有縁。有縁既盡、遷神涅槃」[T3:161b]。

(四〇) 【規重矩疊】「重規疊矩」と同じ。ぴったりと相い合する、規矩法度を同じくする。(例)『孔子家語』序「與予所論、有若重規疊矩」。『晉書』卷五八 周訪傳贊「曰子曰孫、重規疊矩」。

(四一) 【慈雲廣庇】雲が世界を廣く覆うことに慈悲の心を喩える。(例)『觀佛三昧海經』觀像品「南無大德我大和上應正遍知大悲世尊。願以慈雲覆護弟子」[T15:690c]。

(四二) 【善雨周覃】「覃」は、延びる、及ぶの意味。(例) 闍那崛多譯『大集譬喻王經』卷一「若於彼處成就諸味、閻浮洲人得用活命。是故於彼處兩名爲善雨」[T13:948c]。

(四三) 【**皎智日於重昏**】(例)『**文選**』卷五九 頭陀寺碑文「**曜慧日於康衢、則重昏夜曉**」。李周翰注「言二比丘演說佛化、萬物見明、如日照於道、重深昏暗之處、夜中亦曉」。

(四四) 【**燃慧燈於積暗**】(例)『**過去現在因果經**』卷三「**衆生墮大黑暗之中、茫然不知所止之處。菩薩爲然大智慧燈**」[T3641a]。

(四五) 【**六度之船**】六度は六波羅蜜のこと。菩提に至るための菩薩の六つの實踐徳目。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧。(例)『**廣弘明集**』卷二〇 皇太子臣綱(のち梁簡文帝) 大法頌(并序)「**豈若然智慧之炬、照生死之闇、出五陰之聚、升六度之舟、浮衆徳之海、踐不生之岸**」[T52:240c]。

(四六) 【**熾宅揚煙、三乘之轍俱轉**】火宅に迷う衆生を三乗の教えによって救い出す。(出典)『**妙法蓮華經**』譬喻品「**如來亦復如是、雖有力無所畏而不用之、但以智慧方便、於三界火宅拔濟衆生、爲說三乘・聲聞・辟支佛・佛乘、而作是言、汝等莫得樂住三界火宅、勿貪寵弊色聲香味觸也。若貪著生愛、則爲所燒。汝速出三界、當得三乘・聲聞・辟支佛・佛乘**」[T0:13b]。

(四七) 【**層山納於芥子**】(出典)『**維摩詰所說經**』不思議品「**若菩薩住是解脫者、以須彌之高廣、內芥子中、無所增減、須彌山王本相如故、而四天王忉利諸天不覺不知己之所入、唯應度者乃見須彌入芥子中、是名住不思議解脫法門**」[T14:546b]。

(四八) 【**欽岑**】山が高峻なさま。(例)『**楚辭**』招隱士「**欽岑嵒嶷兮**」。王逸注「**山阜岬岬**」。

(四九) 【**巨海入於毛孔**】(出典)『**維摩詰所說經**』不思議品「**又以四大海水入一毛孔、不燒魚、鼈、鼉、鼉水性之屬、而彼大海本相如故、諸龍、鬼神、阿修羅等、不覺不知己之所入、於此衆生亦無所燒**」[T14:546bc]。

(五〇) 【浩淼】水面が廣く悠遠なさま。(例) 『元和郡縣圖志』卷三四 南海縣「自此出海、浩淼無際」。

(五一) 【伏闍世之狂象】(出典) 『涅槃經』梵行品「善男子、如提婆達教阿闍世欲害如來。是時我入王舍大城次第乞食。阿闍世王即放護財狂醉之象、欲令害我及諸弟子。・・・善男子、我於爾時爲欲降伏護財象故、即入慈定舒手示之、即於五指出五師子。是象見已其心怖畏、尋即失糞。舉身投地敬禮我足」[T12:457b]。他にも『增壹阿含經』卷九 慚愧品などに見える。

(五二) 【彌迦葉之毒龍】(出典) 『四分律』卷三一「爾時世尊遊鬱鞞羅。時鬱鞞羅婆界有梵志、名鬱鞞羅迦葉、於彼住止、將五百螺髻梵志、爲最尊長師首。鴛伽摩竭國中、皆稱爲阿羅漢。爾時世尊詣鬱鞞羅迦葉所、到已詰言、吾欲借室寄止一宿。可爾以不。報言、不惜、但此室有毒龍極惡、恐相害耳。佛言、無苦、但見借、龍不害我」[T22:793b]。他にも『太子瑞應本起經』など多くの經典に類話有り。

(五三) 【波旬】魔王。ここでは阿闍世を指す。

(五四) 【梵志】婆羅門の漢譯。もと竺法護の譯語。前掲注(五二)『四分律』の文を参照。ここでは鬱鞞羅迦葉のこゝろ。

(五五) 【最尊最勝莫高於法王】(例) 『涅槃經』壽命品「夫如來者、天上人中最尊最勝」[T12:373c]。『涅槃經』師子吼品「如來法王眞實無上」[T12:541b]。

(五六) 【非滅示滅】釋尊の寂滅は假の姿であることをいう。(例) 『國清百錄』卷三「在昔雙林示滅非滅、多寶獨塔俟時涌現」[T46:814a]。

(五七) 【慈父】(例) 『悲華經』諸菩薩本授記品「攝取衆生、猶如慈父」[T3:204b]。

【③九〇行目 佛滅後、世を救済するのは誰か？】

【訓讀】

是に於いて鄣巖徒らに朗らかにして（五八）、木に値うは終に難し（五九）。虚しく白鶴の林（六〇）を瞻、誰か青雀の樹（六一）に逢わん。翻つて水をして功德と言うも（六二）、永く波濤を遏め、山をして智慧と名づくも（六三）、遂に峯崿（六四）に潜ましむ。其れ能く清化（六五）を將に淪まんとするに聞き、玄風（六六）を以に墜つるに振うは、千年一有、我に非ずして誰ぞ。

【現代語譯】

そういうわけで、煩惱の山はいたずらに明朗であり、浮き木に遭遇するのは難しい。むなしく沙羅雙樹を見るだけであり、誰が菩提樹に出會えようか。水を功德とよぶが永らく救いの波を止めており、山を智慧というが、高く険しい山に隠れてしまっている。清明な教化をまさに沈もうとするところに開き行い、玄妙な風をすでに墜ちてしまった地に起こす者は、千年にただ一人であり、それは私以外に誰がいようか。

【語釋】

（五八）【鄣巖徒朗】典據不明。鄣巖は業障山（煩惱の山）の意味か。銘にも「惚（惱）峯」と類語がみえる。『華嚴經』入法界品「入一切佛諸功德海、壞一切煩惱魔業障山」[T09:743c]などを踏まえた表現か。

【五九】【值木終難】(出典)『雜阿含經』卷一五「譬如大地悉成大海、有一盲龜壽無量劫、百年一出其頭、海中有浮木、止有一孔、漂流海浪、隨風東西。盲龜百年一出其頭、當得過此孔不。(中略)盲龜浮木、雖復差違、或復相得。愚癡凡夫漂流五趣、暫復人身、甚難於彼」[T2:108c]。『大莊嚴論經』卷六「巨海極廣大、浮木孔復小、百年而一出、得值甚爲難。我今池水小、浮木孔極大、數數自出頭、不能值木孔。盲龜遇浮木、相值甚爲難。惡道復人身、難值亦如是。我今值人身、應當不放逸。恒沙等諸佛、未曾得值遇。今日得諮受十力世尊言、佛所說妙法、我必當修行」[T4:291c]。

【六〇】【白鵠之林】佛が涅槃した場所である娑羅雙樹林。(例)僧祐『釋迦譜』卷四「爾時拘尸那城娑羅雙樹林、其林變白、猶如白鵠。於虛空中自然而有七寶堂閣。彫文刻鏤、流泉浴池、上妙蓮花、亦如忉利歡喜之園。是諸天人阿修羅等、咸覩如來涅槃之相、皆悉悲感」[T50:69b]。

【六一】【青雀之樹】佛が成道した場所である菩提樹。(例)『太子瑞應本起經』卷下「佛初得道、自知食少身體虛輕、徐起入水洗浴、畢欲上岸、天按樹枝、得攀而出、旋往樹下。有五百青雀、飛來繞佛、三匝而去」[T3:479a]。

【六二】【水言功德】八功德水のこと。(例)『涅槃經集解』卷二 序品「道慧記曰、八功德水者、謂輕、冷、軟、美、清淨、不臭、飲時調適、飲已無患也」[T37:387c]。

【六三】【山名智慧】(例)『涅槃經』如來性品「如來悉斷無量煩惱、住智慧山」[T2:415c]。

【六四】【峯粵】高く険しい山。(例)『宋書』卷四二 劉穆之傳「峯粵聳秀、林樹繁密」。

【六五】【清化】清明な教化。(例)『後漢書』列傳一六 鄧騭傳「能宣贊風美、補助清化、誠慚誠懼、無以處心」。

(六六) 【玄風】 清靜無爲の教化。(例) 『文選』卷三八 庾亮 讓中書監表「遂階親寵、累忝非服、弱冠濯纓、沐浴玄風」。呂延濟注「沐浴天子道教」。『宋書』禮志一「今皇恩遐震・・・將灑玄風於四區、導斯民於至德」。

【④一〇一四行目 婁定遠の出自、都での事跡】

【訓讀】

使持節・都督青州諸軍事・驃騎大將軍・青州刺史・司空公・寧都縣開國公・高城縣開國公・昌國侯・臨淮王婁公、彩を中岳に孕み、精を大水に擱く(六七)。龍章(六八)外に動き、豹氣傍らに飛す。妙質(六九)は罔らかなること珠の明らかなるが若く、瓌姿(七〇)は朗らかなること猶お玉の瑩らかなるがごとし。將相の奇器を負い、社稷の高節を懷く。文を經むるの大徳、紛綸にして九を備え(七一)、武を佩ぶるの殊功、雜踏して七を兼ね(七二)。羽を拂えば則ち風を搏ち漢を歴、足を抗ぐれば則ち塵を超え影を絶つ(七三)。管樂(七四)の小爲るを知り、元愷(七五)の大に非ざるを識る。天地の間に鼓盪(七六)し、雲霞の表に疏散(七七)す。帝門を排きて首を矯げ(七八)、皇慈に沐して鱗を濯う(七九)。壤を裂き珪を分かたるや(八〇)、且夕にして兼ね委ねられ(八一)、儀台(八二)にて衰(八三)を服するに、造次に之を以てす(八四)。始めて金蟬(八五)を映ずれば、丁劉(八六)を漢日(八七)に鄙しみ、暫く鷓沼(八八)に栖まば、陳張(八九)を晉京(九〇)に蔑む。履、毎に南宮(九二)に曳き、職、頻りに北斗(九二)に關わる。文昌(九三)に迄りて鳳のごとく跼まり、鉤陳に入りて虎のごとく跨む(九四)。

【現代語譯】

使持節・都督青州諸軍事・驃騎大將軍・青州刺史・司空公・寧都縣開國公・昌國侯・臨淮王である
婁公はひかりを嵩山に孕み、精を黃河にうけた。優れた容姿が外に動くと、豹氣が周りに飛ぶ。その優れた資質は珠
のように輝かしく、その美しい姿は玉のようにつややかである。將軍や宰相の優れた器量を持ち、國家の社稷を擔う
高い節義を懐いている。文治による大いなる德澤は九つの功を兼ね備え、武力による特別な功績は、七つのすぐれた
德を備えていた。羽をはばたかせれば風をきり銀河を歴、足をあげれば世俗を超え影を絶する。管仲・樂毅の小であ
ることを知り、八元・八愷ですら大ではないことがわかる。天地をかけめぐり、雲霞の外にまで廣がる。皇帝の門を
くぐり帝の側近として堂々としており、帝の慈愛恩澤に浴しのびのびと振る舞った。分封されるや、たちまちのうち
にさらに別封され、儀台にて袞衣を着けること、危急の時もそうであった。初めて侍中の官につくと後漢の丁鴻や劉
愷よりも聲望は勝り、朝廷に身をおくや、西晉王朝の功臣である陳騫や張華さえも比較にならないほど素晴らしかつ
た。つねに尚書の官に居り、頻繁に帝事にも關わった。尚書に到ると鳳凰のごとくとどまり、後宮に入れば虎の如く
睨みをきかせた。

【語釋】

(六七) 【孕彩中岳、摛精大水】「中岳」は嵩山。「大水」はここでは黃河。『史記』卷二二三 大宛列傳「其人民乘
象以戰。其國臨大水焉」。張守節正義「大水、河也」。(例) 北齊封子繪墓誌(趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』
天津古籍出版社、二〇〇八年(改訂再版)、(以下『墓誌彙編』と略) 四二三頁)「公摛光漢藻、孕彩崑丘、
無忝良弓、剋荷堂構」。

(六八) 【龍章】すぐれた容姿。『晉書』卷四九 嵇康傳「龍章鳳姿、天質自然」。龍章には皇帝の儀仗、征伐を行う大將の旗などの意味もある。

(六九) 【妙質】すぐれた資質。『文選』卷一三 禰衡 鸚鵡賦「惟西域之靈鳥兮、挺自然之奇姿、體金精之妙質兮、合火德之明輝」。

(七〇) 【瓊姿】瑰姿。美しい容姿。『文選』卷一七 傅毅 舞賦「軼態橫出、瓊姿譎起」。李善注「瓊、美也」。

(七一) 【經文大德紛綸而備九】「經文」は文をおさめる。文を主とする治。「佩武」と對應する。(例)『弘明集』卷一四 檄魔文「善武經文、忠著皇闕」[T52:92c]。「大德」は、おおいなる德澤。(例)『詩』小雅 谷風「忘我大德、思我小怨」。「紛綸」は、多いこと。(例)『史記』卷一一七 司馬相如列傳「紛綸威蕤、堙滅而不稱者、不可勝數也」。「九」は九功。(出典)『左傳』文公七年「六府、三事、謂之九功。水、火、金、木、土、穀、謂之六府。正德、利用、厚生、謂之三事」。(例)『梁書』武帝紀上「文洽九功、武苞七德」。

(七二) 【佩武殊功雜踏而兼七】「殊功」は、すぐれた功績。「雜踏」は繁多なさま。踏は沓に通ず。「七」は七德。(出典)『左傳』宣公十二年「夫武、禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和衆、豐財者也。武有七德、我無一焉」。

(七三) 【超塵絕影】(例) 僧肇『注維摩詰經』卷一〇 法供養品「微妙無像、非明者之所觀。超絕塵境、無染若空」[T38:415a]。

(七四) 【管樂】管仲と樂毅の並稱。前者は春秋時代の齊國の名相、後者は戰國時代の燕國の名將。『文選』卷四七 袁宏 三國名臣序贊「孔明盤桓、俟時而動、遐想管樂、遠明風流」。李善注「蜀志曰、諸葛亮每自比於管仲

樂毅。時人莫之許也」。

(七五) 【元愷】「元凱」と同じ。八元・八凱の略稱。(出典)『左傳』文公十八年「昔高陽氏有才子八人、蒼舒、隤、敷、檮戴、大臨、彤降、庭堅、仲容、叔達。齊聖廣淵、明允篤誠、天下之民謂之八愷。高辛氏有才子八人、伯奮、仲堪、叔獻、季仲、伯虎、仲熊、叔豹、季狸、忠肅共懿、宣慈惠和。天下之民謂之八元」。

(七六) 【鼓盪】はげしく動く。(例)『華嚴經』菩薩十住品「震動一切佛世界、傾覆鼓盪諸大海」[P:417a]。

(七七) 【疏散】廣がり分散する(例)『魏書』卷三六 李騫傳 釋情賦「跌蕩世俗之外、疏散造化之間」。

(七八) 【排帝門而矯首】帝の側近として堂々としているさま。(例)『楚辭』九歎 遠遊「排帝宮與羅囿兮」。注「言遂排開天帝之宮、入其羅囿」。「矯首」は頭をあげる、堂々として得意なさま。(例)『漢書』卷八七上 揚雄傳 甘泉賦「仰矯首以高視兮」。師古注「矯、舉也。・・・矯與矯同、其字從手」。「抱朴子」外篇 名實「至於驚蹇矯首於瑠瑯、駭驥委牧乎林垌、彼已尸祿、邦國殄瘁、下凌上替實此之由」。

(七九) 【沐皇慈以濯鱗】皇帝の恩澤に浴し、のびのびと振る舞うさま。(例)『文選』卷一九 補亡詩「肅肅君子由儀率性、明明后辟仁以爲政。魚游清沼、鳥萃平林、濯鱗鼓翼、振振其音、賓寫爾誠、主竭其心、時之和矣、何思何修」。李周翰注「言明君以仁愛爲政則魚鳥各得其性」。婁定遠は武成帝に寵愛されたことが正史の傳にみえる。

(八〇) 【裂壤分珪】「裂壤」は、帝王が土地を分封し諸侯を建立すること、「分珪」は帝王が官爵を封賜すること。

(例)『藝文類聚』卷五〇 刺史 爲鄱陽嗣王(南朝梁の蕭範) 初讓雍州表「漢啓三僎、分珪舊楚」。

(八一) 【旦夕兼委】碑文によれば、婁定遠は臨淮郡王、寧都縣開國公・高城縣開國公・昌國侯を兼ねている。

(八二)【儀台】(例) 是連公妻邢夫人墓誌銘(『墓誌彙編』四一一頁)「服玄袞以儀台、駕朱輪而刺舉」。『隋書』高祖紀上「擅誅刺舉之使、專殺儀台之臣」。『翰苑新書』前集卷三六では開府儀同三司の項に「儀台」がある。臨淮王像碑文の場合、具體的に何を指すかは不明である。

(八三)【袞】龍を描いた禮服。三公を指す場合もある。『文選』卷一五 張衡 思玄賦「董弱冠而司袞兮、設王隧而弗處」。李善注「『漢書』曰、董賢年二十二爲三公」。(例)『周禮』春官 司服「享先王則袞冕」。鄭玄注引鄭司農曰「袞、卷龍衣也」。『後漢書』列傳四九 張衡傳「申伯、樊仲、實幹周邦、服袞而朝、介圭作瑞」。『南齊書』卷四四 徐孝嗣傳「建武四年、即本號開府儀同三司。孝嗣聞有詔、斂容謂左右曰、吾德慙古人、位登袞職、將何以堪之」。

(八四)【造次以之】(出典)『論語』里仁「君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是」。

(八五)【金蟬】侍中、中常侍の冠飾。金は堅剛、蟬は高きに居り潔を飲むの意。『北史』卷一八 任城王雲傳「高祖、世宗皆有女侍中官、未見綴金蟬於象珥、極輝貂於鬢髮」。

(八六)【丁劉】後漢の丁鴻と劉愷。丁鴻は『後漢書』列傳二七に立傳。丁綝の子。儒者。本傳に「永平十年詔徵、鴻至即召見、說文侯之命篇、賜御衣及綬、稟食公車、與博士同禮。頃之、拜侍中」、「鴻以才高、論難最明、諸儒稱之、帝數嗟美焉。時人嘆曰、殿中無雙丁孝公」とある。劉愷は『後漢書』列傳二九に立傳。劉般の子。父からの襲爵を避けて弟に譲り、後にその行爲が賞讃され和帝が下した詔によって徵され郎を拜し、遷して侍中となった。「愷之入朝、在位者莫不仰其風行」と、その風行が朝廷で稱えられた。

(八七)【漢日】漢王朝。(例)『隋書』卷七七 隱逸 序言「語曰、舉逸民、天下之人歸心焉。雖出處殊途、語默異

用、各言其志、皆君子之道也。洪崖兆其始、箕山扇其風、七人作乎周年、四皓光乎漢日、魏晉以降、其流逾廣。

(八八)【鶴沼】「鶴池」と同じ。朝廷を指す。(例)元誨墓誌(『墓誌彙編』二七三—二七四頁)「轉衛將軍中書監。鶴沼載清、王言允穆」。『隋書』卷七七 隱逸 崔曠「漢則馬遷、蕭望、晉則裴楷、張華、雞樹騰聲、鶴池播美」。

(八九)【陳張】陳騫と張華。ともに西晉王朝の功臣。『晉書』卷三五、卷三六にそれぞれ立傳。

(九〇)【晉京】(例)『文選』卷二〇 潘岳 金谷集作詩「朝發晉京陽、夕次金谷湄」。李善注「晉京、洛陽也」。

(九一)【南宮】尚書省の別稱。尚書省は列宿の南宮にかたどるのでかくいう。定遠は并省尚書左僕射、尚書左僕射、并州尚書令を歴任している。(例)『後漢書』列傳二三 鄭弘傳「建初、爲尚書令……弘前後所陳有補益王政者、皆著之南宮、以爲故事」。

(九二)【北斗】帝王の喩え。『晉書』天文志上「北斗七星在太微北……斗爲人君之像、號令之主也」。

(九三)【文昌】ここでは尚書省を指す。(例)『藝文類聚』卷四八 職官部四 尚書令 隋江總讓尚書令表「竊以天府文昌萬方之數、天官冢宰無所不統」。

(九四)【鉤陳而虎盼】『百品』校注は「盼」を「盼」に作る。「鉤陳」は後宮。(例)『文選』卷一 班固 西都賦「周以鉤陳之位、衛以嚴更之署。李善注引『樂汁圖』「鉤陳、後宮也」。「虎盼」というのは、暗に恩倖和士開らとの對立を指して言うか。

【⑤一四〇一六行目 青州が諸州に冠たること】

【訓讀】

穆陵（九五）より北し、負海（九六）より西す、分は虚危に屬し（九七）、音は角羽に中たる（九八）。連衽は密雲と暗さを争い（九九）、旨酒は澠流と深さを競う（一〇〇）。其鳩曾て茲の所に樂しみ（一〇一）、尚父經（か）て此の域に封ぜらる（一〇二）。孔融の圍まるるや、史慈、難を都昌に冒す（一〇三）。袁譚の攻めらるるや、王脩、禍に高密に赴く（一〇四）。丹山（一〇五）を聳えしめ峭立たり、紫城（一〇六）を迴らし鬱連たり。燕を敗るの勢（一〇七）未だ淪まず、漢を巨（こほ）むの容（一〇八）尚お在り。是れ名岳（一〇九）爲り、實とに諸蕃に冠たり。刺を茲に乗るに、義は親重（一一〇）に歸す。故に能く旗蓋を整え（しやうがい）周闔（一一一）を辭し、筋鏡（ととの）を節え（一二二）營丘（一二三）に下る。

【現代語譯】

（青州の地は、）穆陵より北、負海より西である。二十八宿では虚・危にあたり、五音では東北の角・羽にあたる。人の多いことは密集した濃い雲と暗さを争うほどであり、美酒は澠水と深さを競う。爽鳩はかつてこの地に居し、周の太公望も以前この地に封ぜられた。孔融が賊によって包圍された際には太史慈が難を冒し（包圍をかくぐって孔融のために救援を求める使者となつ）た。袁譚が攻められると、王脩は、彼を助けに高密まで到った（ところで袁譚がすでに死んだことを知った）。丹山がそびえ、けわしくそば立ち、長城がめぐらされ長々と連なっている。その昔、齊の田單が燕を破った勢いはいまだなくなっておらず、齊王の田横が漢の劉邦の招聘を拒んだ威容はなお残っている。この地は名だたる藩であり、諸藩の中でも第一である。この地の刺史にふさわしい人物として、帝に親近し重ん

ぜられている人物（婁定遠）が選ばれた。そこで定遠は、旗や傘蓋を整え、京城に別れを告げ、笳鏡を鳴らして營丘へと赴いた。

【語釋】

(九五) 【穆陵】山東省臨朐縣南、大峴山の上にある關。左右に長城、書案の二嶺があり狹峻の地。青州の南に位置する。

(九六) 【負海】『管子』注の解釋によれば、四夷に接する遠國のこと。碑文では特に山東半島東部の邊境の地を指しているようである。『管子』霸言「以負海攻負海、中國之形也」。注「海、晦也、九夷八狄七戎六蠻、謂之四海。負海謂遠國接四夷者。『戦国策』齊策一「齊西有強趙、南有韓魏、負海之國也。地廣人衆、兵強士勇、雖有百秦、將無奈我何」。『史記』卷七〇 張儀傳「齊西有強趙、南有韓與梁。齊、負海之國也。地廣民衆、兵彊士勇、雖有百秦、將無奈齊何」。『史記』卷一一二 平津侯主父傳「又使天下蜚芻輓粟、起於黃・睡・琅邪負海之郡、轉輸北河」。

(九七) 【分屬虛危】「虚」・「危」は二十八宿のうち北方の星。青州に配當される。『史記』卷二七 天官書「虚・危、青州」。

(九八) 【音中角羽】五音のうち角・羽はそれぞれ東、北に配當される。青州は方角で言えば中國の東北部なのでこのいうと考えられる。

(九九) 【連枉與密雲爭暗】「連枉」は、襟を列ねる。人が多いさま。(出典)『太平御覽』卷三八七所引 左思 齊

都賦序「連衽有雲覆之陰、揮汗有雨洒之濡」。『戰國策』齊策一「蘇秦爲趙合從、說齊宣王曰、齊南有太山、東有琅邪、西有清河、北有渤海、此所謂四塞之國也。・・・臨淄之途、車轂擊、人肩摩、連衽成帷、舉袂成幕、揮汗成雨、家敦而富、志高而揚」。『密雲』は密集した濃い雲。

(二〇〇)【旨酒共漚流競深】(出典)『左傳』昭公十二年「齊侯舉矢曰、有酒如漚、有肉如陵」。『旨酒』は美酒、「漚流」は漚水のこと。今の山東省臨淄の西北。古の齊城外より西北流し、麻大湖に注ぐ。

(二〇一)【其鳩曾樂於茲所】「其鳩」は「爽鳩」。(出典)『左傳』昭公十二年「晏子對曰、・・・昔爽鳩氏始居此地」。杜預注「爽鳩氏、少皞氏之司寇也」。

(二〇二)【尚父經封於此域】「尚父」はまた「尚甫」につくる。周の太公望(呂尚)。(出典)『史記』卷四 周本紀「於是封功臣謀士、而師尚父爲首封、封尚父於營丘、曰齊」。

(二〇三)【孔融之見圍也、史慈冒難於都昌】母が孔融から受けていた恩義に報いるため、太史慈は都昌にて黃巾賊に包圍されていた孔融を助け、包圍をかくぐり、劉備に救援を求めに使用した故事。(出典)『三國志』呉書 卷四九 太子慈傳。

(二〇四)【袁譚之被攻焉、王脩赴禍於高密】(出典)『三國志』魏書 卷一一 王脩傳「太祖遂引軍攻譚于南皮。脩時運糧在樂安、聞譚急、將所領兵及諸從事數十人往赴譚。至高密、聞譚死、下馬號哭曰、無君、焉歸。遂詣太祖、乞收葬譚屍」。

(二〇五)【丹山】今の山東省臨胸縣東北の紀山。『水經注』卷二六 巨洋水「朱虛城西有長坂遠峻、名爲破車峴。城東北二十里有丹山。世謂之凡山」。

(二〇六)【紫城】「紫塞」には長城の意味あり。『古今注』卷上に「紫塞、秦築長城、土色皆紫、漢塞亦然。故稱紫塞焉」とある。

(二〇七)【敗燕之勢】『史記』卷八二 田單列傳など参照。齊は燕に七十餘城を攻め取られたが、田單は即墨の城を守り、燕の兵を次々と破り、もとの領地を回復した。

(二〇八)【巨漢之容】『大村』『佛蹟』『魯』『百品』『校注』は「漢」を「漠」に作る。「巨」は「拒」に通ず。『史記』卷九四 田儋列傳参照。漢の劉邦は、徒屬五百餘人とともに島に逃れていた齊王田横を都に招聘しようとしたが、田横は都への途上で自害し、つづいて劉邦が招こうとした彼の食客や五百餘人までみな自害した故事。劉邦は田横を王者の禮によって葬った。

(二〇九)【名岳】「岳」は諸侯の汎稱。(出典)『尚書』堯典「帝曰、咨四岳、朕在位七十載、汝能庸命、異朕位。岳曰、否德、忝帝位」。『文選』卷二四 潘岳 爲賈謐作贈陸機詩「藩岳作鎮、輔我京室」。呂延濟注「藩岳、謂諸侯也」。

(二一〇)【旗蓋】儀仗中の旗と傘。

(二一一)【閭闔】宮門、轉じて京城のこと。(例)『三輔黃圖』漢宮「正門曰閭闔、高二十五丈、亦曰璧門」。

(二一二)【節笳鏡】「笳」はあしぶえ、「鏡」は槌で打ち鳴らす樂器。ともに軍中で用いる樂器。節はただす、ととのえる、ほどよくするの意味。

(二一三)【營丘】太公望が封ぜられた地。今の山東省臨淄の北。(二〇二)の『史記』の文を参照。

【⑥一六〇一九行目 青州刺史としての事跡】

【訓讀】

帷始めて關かるるや郷移り（二一四）、冕纓かに彰わるるや俗變ず。三春（二一五）未だ動かずして、別に春、颺（しゅんぴょう）（二一六）を鼓ち、九冬（二一七）作かずして、自ら冬景を懸ぐ。之を齊うるに禮を以てし、之を導びくに徳を以てす（二一八）。寛大もて先に居せしめ（二一九）、威嚴もて次後にす。孤寡を哀恤し、豪黠を誅鋤（二二〇）す。徭役既に擯け、奸軌斯ち逃ぐ。廉を持て寶と作し、目、金玉を視ず（二二一）。財に匪ずして富み（二二三）、身、詎ぞ脂膏に染まらん（二二三）。遂に神雀（二二四）をして苑に集い、災蝗をして域を避けしむ（二二五）。孝子は順孫と藜秀（二二六）し、節妻は義士と相い望む。凡そ此の如きの流、抑そも亦た衆夥にして、備さに序ぶる能わざるも、敢えて復た略言す。假い細侯の美稷を行り（二二七）、孟堅の交趾を案じ（二二八）、子虞の最と區中に稱され（二二九）、梁道の法と竇内に作るとも（二三〇）、持ち來りて我に況ぶれば、退飛せざる無し。

【現代語譯】

帷が初めてあげられると、それまで教に従わなかつた者が禮を學び始め、冠冕が初めてあらわれると風俗が變わつた。春の三ヶ月がたたないうちに春のつむじ風を起こし、冬の九十日をすぎないうちに自ら冬の太陽をかかげた。禮によつて人々を整え、徳によつて導いた。寛大を先として威嚴を後にした。孤兒寡婦を慰撫し、強暴狡猾な者を誅滅した。徭役がなくなり、姦邪不法の者が逃げ出した。清廉を寶とし、金や玉には目もくれなかつた。財に頼らず富裕であり、身は富裕な地にあつても潔白を保ち染まらなかつた。ついには、神聖な雀が苑に集まり、害をもたらず蝗が

この地を避けるようになった。孝行の子と孫が成長し、高節の妻は高義の士とあい望むほど多くなった。およそこのようなことは多すぎてつぶさには語ることができないが、あえてまたあらましを述べるのである。たとえ郭伋が美稷の地を巡行し、賈琮が交趾の地を巡察し、梁習が并州刺史として天下で治績が第一と稱えられ、賈逵が豫州刺史として天下の手本とされたといっても、私に比べてみれば、退かない者はいないのである。

【語釋】

(一一四)【郷移】郷學を移つて習禮すること。教に従わなかつた者が禮を學び始める。(出典)『禮記』王制「命國之右郷簡不帥教者移之左、命國之左郷簡不帥教者移之右」。

(一一五)【三春】春季の三ヶ月。一月孟春、二月仲春、三月季春。

(一一六)【春飈】「飈」はつむじかぜの意味。

(一一七)【九冬】冬季。冬季は九十日なのでかくいう。

(一一八)【齊之以禮、導之以德】(出典)『論語』爲政「子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以德、齊之以禮、有恥且格」。

(一一九)【寬大居先】(例)袁宏『後漢紀』卷一一「建初四年」司空第五倫以爲、政化之本、宜以寬和爲先。

(一二〇)【誅鋤】また「誅鉏」にも作る。鋤によって草茅を除去する、轉じて除滅、誅滅する。(例)陸賈『新語』慎微「今上無明王聖主、下無貞正諸侯、誅鋤姦臣賊子之黨、解釋疑滯紕繆之結」。

(一二二)【目弗視於金玉】(例)『四十二章經』卷一「佛言、吾視諸侯之位如過客、視金玉之寶如礫石、視麤素之好

如弊帛」[T17:724a]。

(一一二)【匪財而富】(出典)『淮南子』原道訓「不待勢而尊、不待財而富、不待力而強」。

(一一三)【身詎染於脂膏】「脂膏」は財富または、富裕な地。(例)『北堂書鈔』卷七八所引 傅玄『傅子』「劉鈞爲

穎陰相、不爲脂膏之染、三年無書與京師」。

(一一四)【神雀】瑞鳥。(例)『文選』卷五一 王褒(前六〇) 四子講德論「神雀仍集、麒麟自至」。劉良注「神雀、瑞鳥」。

(一一五)【災蝗避域】(例)『後漢書』列傳一五 卓茂傳「數年、教化大行、道不拾遺。平帝時、天下大蝗、河南二十餘縣皆被其災、獨不入密縣界」。

(一二六)【藜秀】「藜」は「叢」と同じ。聚集・叢生。「秀」は實る、成長するなどの意。

(一二七)【細侯之行美稷】(出典)『後漢書』列傳二一 郭伋傳「郭伋字細侯、扶風茂陵人也。帝以盧芳據北土、乃調伋爲并州牧。始至行部、到西河美稷、有童兒數百、各騎竹馬、道次迎拜。伋問、兒曹何自遠來。對曰、聞使君到、喜、故來奉迎。伋辭謝之。及事訖、諸兒復送至郭外、問、使君何日當還。伋謂別駕從事、計日告之。行部既還、先期一日、伋爲違信於諸兒、遂止于野亭、須期乃入」。

(一二八)【孟堅之案交趾】(出典)『後漢書』列傳二一 賈琮傳「賈琮字孟堅、東郡聊城人也。中平元年、交趾屯兵反、執刺史及合浦太守、自稱「柱天將軍」。靈帝特敕三府精選能吏、有司舉琮爲交趾刺史。琮到部、訊其反狀、咸言賦斂過重、百姓莫不空單、京師遙遠、告冤無所、民不聊生、故聚爲盜賊。琮即移書告示、各使其資業、招撫荒散、蠲復徭役、誅斬渠帥爲大害者、簡選良吏試守諸縣、歲間蕩定、百姓以安。巷路爲之

歌曰、賈父來晚、使我先反、今見清平、吏不敢飯。在事三年、爲十三州最、徵拜議郎。

(二二九)【子虞稱最於區中】(出典)『三國志』魏書 卷一五 梁習傳「梁習字子虞、陳郡柘人也、…并土新附、習以別部司馬領并州刺史。…政治常爲天下最」。

(二三〇)【梁道作法於寰內】(出典)『三國志』魏書 卷一五 賈逵傳「賈逵字梁道、河東襄陵人也、…至譙、以逵爲豫州刺史。…考竟其二千石以下阿縱不如法者、皆舉奏免之。帝曰、逵眞刺史矣。布告天下、當以豫州爲法」。

【⑦一九〜二〇行目 彌陀の願】

【訓讀】

兼ねて憤然として嘆を興すこと、羊公の峴のぼに陟るに類し(二三二)、喟然として感を垂るること、孔父の川に臨むに切ちかし(二三三)。此の有の拘とどめ難きを悲しみ、茲の生の滅し易きを慨く。常住の因(二三三)遂に植えられ、彌陀の願(二三四)仍りて起こる。故もとより海岱(二三五)の間、凡そ諸の福地、傾蓋(二三六)せざるなく、悉く慰誠を展ぶ。是に於て民吏規のりを承け(二三七)、事、捨し難くして能く捨し(二三八)、表裏化を蒙り、業、行い難くして遂行す(二三九)。何ぞ草の風に逐したがいて低たれ(二四〇)、水の壺に従いて變ずる(二四一)に異ならん。僧寶因りて再び盛え、佛日由りて更に懸げらる。

【現代語譯】

また、憤然として慨嘆すること、羊祜が峴山に登ったことに似ており、嘆息して感嘆すること、孔子が川に臨んだことと同じようなものである。この世のあらゆる存在が留め難いことを悲しみ、この生が滅しやすいことを歎く。かくして常住の因が植えられ、阿彌陀佛の願が起るのである。この青州のすべての福地において人々は出會うとたがいに語り合つて、みな真心を表した。ここにおいて人民や官吏は教えを承け、捨てがたいものをよく喜捨し、内外が教化を蒙り、行うことが難しいことをよく行つた。これは草が風になびいて垂れ、水が壺の形に従つて變形するようになるものである。僧寶は再び盛んとなり、佛日も再び高くかかげられた。

【語釋】

(二三) 【類羊公之陟峴】「羊公」は西晉の羊祜(泰山南城の人)、「峴」(峴山)は今の湖北省襄樊市襄陽區の南。峴首山ともいう。東は漢水に臨み、襄陽の南の要塞。羊祜が峴山に登り、時がたてば自らの名が忘れられてしまうことを慨嘆した故事。(出典)『晉書』卷三四 羊祜傳「祜樂山水、每風景、必造峴山、置酒言詠、終日不倦。嘗慨然歎息、顧謂從事中郎鄒湛等曰、自有宇宙、便有此山。由來賢達勝士、登此遠望、如我與卿者多矣。皆湮滅無聞、使人悲傷。如百歲後有知、魂魄猶應登此也。湛曰、公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、必與此山俱傳。至若湛輩、乃當如公言耳」。

(二三) 【切孔父之臨川】『百品』は「切」を「切」に作る。(出典)『論語』子罕「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜」。疏「此章記孔子感歎時事既往、不可追復也」。

(一三三)【常住之因】(例)『涅槃經集解』卷四 純陀品「僧宗曰、經之五別、此下兩品是第二開宗、明常住因果也。通分爲三段。第一因施以明常。亦曰因請受供以明常也。從品初訖釋梵諸天等悉來供養我也。第二因請以明常。從一切諸世間悉生大苦惱訖瑠璃珠譬也。第三因會通以明常。即新舊醫譬也」[T37:389a]、同卷二八聖行品「以大乘常住之因爲道」[T37:480a]。

(一三四)【彌陀之願】彌陀の願といえ、阿彌陀佛が因位の法藏菩薩であつたとき、世自在王佛のもとで建立した四十八の願(『無量壽經』卷上)が想起される。ここでは、阿彌陀佛に見えることを願う、あるいは、阿彌陀佛の造像を願うという意味でも解釋できよう。

(一三五)【海岱】今の山東省渤海から泰山に至る間の地帯。青州。(出典)『尚書』禹貢「海岱惟青州」。孔傳「東北據海、西南距岱」。

(一三六)【傾蓋】偶々道で出會い、互いに車蓋を接近させて相語る。一見して相親しむこと。(例)『孔子家語』致思「孔子之郟、遭程子於塗、傾蓋而語終日、甚相親」。

(一三七)【承規】(例)『文選』卷二〇 陸機 皇太子譙玄圃宣猷堂有令賦詩「體輝重光、承規景數」。

(一三八)【難捨而能捨】(例)『大方便佛報恩經』孝養品「爾時、天王釋問太子言、「汝是難捨能捨、身體血肉供養父母。如是功德爲願生天作魔王、梵王、天王、人王、轉輪聖王」[T3:129c]。

(一三九)【難行而遂行】(例)『注維摩詰經』佛國品「隨其心淨則一切功德淨」。注「(羅)什曰、…遇善斯行則難行能行。難行能行故能如所說行。如所說行則萬善兼具。萬善兼具故能迴向佛道」[T38:337a]。

(一四〇)【草逐風低】(出典)『論語』顔淵「君子之德風也、小人之德草也、草上之風必偃」。

(二四二) 【水從壺變】(例) 『劉子』從化「人之從君、如草之從風、水之從器」。

【⑧二〇〕二四行目 南陽寺にて無量壽像を造る】

【訓讀】

南陽寺は乃ち正東(二四二)の甲寺なり。既に左は關闈(二四三)に通じ、亦た右は澗谷(二四四)に憑る。前みては崖壁(二四五)を望み、却きては泚瀾(二四六)に隣す。層圖は湧塔(二四七)に邁り、秘宇は化宮(二四八)に齊し。須達をして其の經啓を羨み(二四九)、延壽をして其の賦頌を韜ましむる(二五〇)に足る。感致(二五一)の極、與に先を争う莫し。果して輪輿を屈し、頻りに禮謁を脩む、香甫めて燃えて霧作り、花劣かに飛びて霰下る。遂に此の所に於いて、爰に佛事を營み、无量壽像一區、高さ三丈九尺を制し、並びに觀世音・大勢至二大士を造り焉に俟せしむ。庶わくは國道、華胥(二五二)と高さを競い、帝業、虚空と壯を比べ、含靈賦命、盡く優花(二五三)を植えんことを。乃ち具するに三心(二五四)を以てし、成すに百寶(二五五)を之てす。白銀の麗、咸く寫し、紫金の妙、畢く圖く(二五六)。豪は五嶺の旋るが如く(二五七)、之に即けば便ち觀ゆるがごとし。目は四溟の潔に似(二五八)、之を驗すれば猶お在すがごとし。毗楞の寶冠、左に帯びて耀を馳せ(二五九)、鉢摩の肉髻、右に據りて光を飛ばす(二六〇)。望舒(二六一)の迥かに星中に處し、須彌の孤り海外に映ずること、僅かに此に方ぶるに堪う、何を以て茲に尚らん(二六二)。

【現代語譯】

南陽寺は青州第一の寺である。左（東）は市街に通じ、右（西）は溪谷に接している。前（南）はそびえたつた山崖を望み、後ろ（北）は清らかな河に隣接する。佛塔は地から湧出する多寶塔にもまさり、佛殿は化作された宮殿にも等しい。須達長者がその建築を羨み、王延壽がその賦頌を隠してしまふほどである。その人を感動させ引き寄せる極致であること、ならび争うものがないのである。果たして人々は車を止め、頻繁に禮拜を行い、香が燃えたと霧がおこり、花が舞い上がると霰が降る。かくしてこの地に佛事を興し、高さ三丈九尺の無量壽像を造り、觀世音・大勢至・二菩薩を脇侍とした。願わくは、國家が華胥のような理想國と優劣を競い、皇帝の業が虚空と壮大さを競い、生きとし生けるものが、みな優曇華を植えますように。そこで、『觀無量壽經』にいう上品上生の者が持つ（三心を心に備え、百寶によって造るのである。白銀の麗しさもことごとく描寫し、紫金の精妙さもすべてえがく。眉間の白毫は五山が旋轉するようであり、近づけばほんとうの佛に對面したごとくである。目は四大海の清らかなごとくであり、よく見ればまるで佛がその場におられるようである。佛の左側には毘楞伽摩尼寶の冠（をつけた觀世音菩薩）が輝きを放っており、右側には鉢頭摩花のような肉髻（を有する大勢至菩薩）が光を放っている。月が遠く多くの星の中に位置し、須彌山がひとり海外に映えていることとようやくこれに比べるのであり、これにまさるものはないのである。

【語釋】

（二四二）【正東】（出典）『周禮』夏官司馬 職方氏「正東曰青州」。

(二四三) 【闌閫】市の垣と門。轉じて、市街。(例)『文選』卷六 左思 魏都賦「班列肆以兼羅、設闌閫以襟帶」。
呂向注「闌閫、市中巷繞市、如衣之襟帶然」。

(二四四) 【澗谷】溪澗山谷。(例)『梁書』卷五一 處士傳 陶弘景傳「每經澗谷、必坐臥其間、吟詠盤桓、不能已」。

(二四五) 【崖磬】「崖」は山がそばだつ、獨り拔きんでる様。「磬」は大きい巖。

(二四六) 【泚瀾】(例)『毛詩』國風 邶 新臺「新臺有泚、河水瀾瀾」。鄭玄箋「泚、鮮明貌。瀾瀾、盛貌」。

(二四七) 【湧塔】多寶塔。(出典)『法華經』見寶塔品。(例)智顛『法華三昧懺儀』卷一「一心奉請南無過去多寶世尊(即應心想、多寶佛塔從地涌出、影現道場、受我供養)」[T46:950c]。

(二四八) 【化宮】化作された宮殿。具體的には龍宮のことか。東魏興和二年廉富義造像記(『魯』第二帙第二册 二八三頁)には序文に「永離八難、共昇化宮」とあり銘に「超離八難、昇彼龍宮」とある。

(二四九) 【須達羨其經啓】須達は祇園精舎を造り、釋迦に施した長者として有名。「經啓」は治めひらく。(例)『左傳』「經啓九道」杜預注「啓開九州之道」。『涅槃經』師子吼品「須達長者七日之中成立大房足三百口。禪房靜處六十三所。冬室夏堂各各別異。厨坊浴室洗脚之處。大小圍廁無不備足。所設已訖、即執香鑪向王舍城遙作是言、「所設已辦、惟願如來、慈哀憐愍爲諸衆生受是住處」。我時玄知是長者心、即與大衆發王舍城、譬如壯士屈伸臂頃、至舍衛城祇陀園林須達精舎。我既到已、須達長者以其所設奉施於我。我時受已即住其中」[T12:541b]。

(二五〇) 【延壽韜其賦頌】(出典)『後漢書』列傳七〇上 王延壽傳「子延壽、字文考、有俊才。少遊魯國、作靈光

殿賦。後蔡邕亦造此賦、未成、及見延壽所爲、甚奇之、遂輟翰而已」。

(二五一) 【感致】感動させ人を引き寄せる。(例)『後漢書』列傳七三 逸民列傳序「是以堯稱則天、不屈潁陽之高、武盡美矣、終全孤竹之絜。自茲以降、風流彌繁、長往之軌未殊、而感致之數匪一」。

(二五二) 【華胥】黃帝が夢で訪れた安樂平和な理想的國家。(出典)『列子』黃帝「黃帝 晝寢、而夢遊於華胥氏之國。華胥氏之國在弇州之西、台州之北、不知斯齊國幾千萬里。(張湛注、斯、離也。齊、中也。)蓋非舟車足力之所及、神遊而已。其國無師長、自然而已。其民無嗜欲、自然而已。不知樂生、不知惡死、故無夭殤。不知親己、不知疏物、故無愛憎」。

(二五三) 【優花】優曇華(優曇鉢華)のこと。(例)智顛『妙法蓮華經文句』卷四上 釋方便品「優曇花者、此言靈瑞。三千年一現。現則金輪王出」[T34:49b]。

(二五四) 【三心】(出典)『觀無量壽經』「佛告阿難及韋提希。上品上生者、若有衆生願生彼國者、發三種心即便往生。何等爲三。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心。具三心者必生彼國」[T12:34c]。

(二五五) 【百寶】各種の珍寶。(例)『觀無量壽經』「佛從耆闍崛山沒、於王宮出。時韋提希禮已舉頭、見世尊釋迦牟尼佛、身紫金色、坐百寶蓮華」[T12:341b]。同「次作水想。……下有金剛七寶金幢、擎琉璃地。其幢八方、八楞具足。一方面百寶所成。……樓閣千萬百寶合成」[T12:342a]。

(二五六) 【白銀之麗威寫、紫金之妙畢圖】白銀と紫金の組み合わせは『無量壽經』卷上「或有寶樹。紫金爲本。白銀爲莖。琉璃爲枝。水精爲條。珊瑚爲葉。瑪瑙爲華。車磔爲實」[T12:270c] などにみえる。

(二五七) 【豪如五嶺之旋】(出典)『觀無量壽經』「次當更觀無量壽佛身相光明。阿難當知、無量壽佛身如百千萬億

夜摩天閻浮檀金色。佛身高六十萬億那由他恒河沙由旬。眉間白毫右旋宛轉如五須彌山。佛眼清淨如四大海水清白分明」[T12:343b]。

(二五八)【目似四溟之潔】「四溟」は、四冥にも作る。四海。(例)『文選』卷二九 張協 雜詩十首「雲根臨八極、雨足灑四溟」。李善注「四溟、四海也」。出典は前注参照。

(二五九)【毗楞寶冠帶左而馳耀】(出典)『觀無量壽經』「次當想佛。．．．想一觀世音菩薩像坐左華座。亦放金光如前無異。想一大勢至菩薩像坐右華座。此想成時、佛菩薩像皆放妙光」[T12:343b]。同「次亦應觀觀世音菩薩。此菩薩身長八十億那由他由旬。身紫金色。頂有肉髻、頂有圓光。面各百千由旬。其圓光中有五百化佛、如釋迦牟尼。一一化佛有五百菩薩無量諸天、以爲侍者。舉身光中、五道衆生一切色相皆於中現。頂上毘楞伽摩尼寶、以爲天冠。其天冠中有一立化佛、高二十五由旬。觀世音菩薩面如閻浮檀金色。眉間毫相備七寶色、流出八萬四千種光明。一一光明有無量無數百千化佛」[T12:343c]。

(二六〇)【鉢摩肉髻據右而飛光】「肉」の字は拓本では缺損している。『青州』「山東」は「穴」、「萃」は□、「益記」『山左』「大村」『佛蹟』「魯」『校注』は「突」に作る。『百品』では、「突」とするが、「突」は「肉」の異體字。(出典)『觀無量壽經』「次觀大勢至菩薩。此菩薩身量大小亦如觀世音。．．．此菩薩天冠有五百寶蓮華。一一寶華有五百寶臺。一一臺中、十方諸佛淨妙國土廣長之相皆於中現。頂上肉髻如鉢頭摩花。於肉髻上一有寶瓶、盛諸光明、普現佛事。餘諸身相如觀世音等無有異」[T12:344ab]。

(二六一)【望舒】月のこと。(例)『後漢書』列傳五〇下 蔡邕傳「元首寬則望舒眺、侯王肅則月側匿」。李賢注「望舒、月也。尚書大傳曰、晦而月見西方、謂久眺。朔而月見東方、謂之側匿」。

(二六二) 【何以尚茲】「尚」はまさる、凌駕するの意味。(例)『漢書』卷九六下、西域傳贊「聖上遠覽古今、因時之宜、鞫縻不絶、辭而未許。雖大禹之序西戎、周公之讓白雉、太宗之卻走馬、義兼之矣、亦何以尚茲」。

【⑨二四～二五行目 州の屬僚】

【訓讀】

時に長史解叔寶、司馬李元驥、別駕宇文幼鸞、治中崔文惠、及び諸の僚佐等(二六三)、竝びに下筵に滄□し、高義に贊成すること、鱗波(二六四)の遞かに得るが状こと、風毛(二六五)の互いに擧ぐるより劇はなはだし。炎涼(二六六)の遞かに徙り、緜竹の存し難きを恐れ、便ち美を貞石に勒し、乾坤に永永たらんこと(二六七)を庶う。迺ち銘を作りて曰わく、

【現代語譯】

時に長史解叔寶、司馬李元驥、別駕宇文幼鸞、治中崔文惠、及び諸僚佐たちは、みな下席にて・・・し、崇高な義に贊成すること、鱗のような波が次々と現れるようであり、鳥毛が風で飛び散るのにもまさっている。暑さと涼しさがにわかに移り、竹帛が保存されにくいのを恐れ、善事を碑石に刻み、天地とともに永久であることを願う。そこで銘をつくつていう、

【語釋】

(二六三) 【長史・・諸僚佐等】州の屬僚は軍事系統(府佐)と行政系統(州佐)の二系統に分かれる。長史、司馬は府佐、別駕、治中は州佐。

(二六四) 【鱗波】魚の鱗のような波紋。次々とあらわれる形容。

(二六五) 【風毛】狩獵の時、鳥の毛が風によって飛びちる。鳥を得ることの多きをいう。(出典)『文選』卷一 班固

西都賦「風毛雨血、灑野蔽天」。張銑注「風毛雨血言毛血雜下如風雨」。

(二六六) 【炎涼】暑いことと涼しいこと、轉じて世態の變遷、榮枯盛衰をいう。(例)『玉臺新詠』卷七 梁 簡文帝 戲作謝惠連體十三韻「含涕坐度日、俄頃變炎涼」。

(二六七) 【永永於乾坤】(例)『續漢書』禮儀志上 劉昭注引『博物記』曰、「孝昭帝冠辭曰、六合之内、靡不蒙德、永永與天無極」。

【⑩二六〇二九行目 銘】

【訓讀】

駛河(二六八) 測り難く、暗海(二六九) 无邊たり、津梁(二七〇) 起こる莫く、燈燭誰か燃やさん。念念住まらず、苦苦相い沿い、生は猶お電の轉ずるがごとく、滅は雲の旋るより甚だし。昔往今來、靈仙一に非ず、龍に騎り虎を駕し、霄を排し日を蔽う。朝に玉樓に登り、夜に瓊室に遊ぶとも、終に聚散に歸す(二七二)、安んぞ假實(二七二)を知らんや。常住無我、寄は天尊よるべに在り、業は眞俗(二七三)を苞み、事は名言(二七四)を斷す。惱峯構を虧き、慧浦源

に疏じ、神儀或いは掩われ、像法（二七五）彌いよ敦し。亦た人英（二七六）有り、翹然（二七七）孤上たり、竹千仞に似、松百丈の如し。鉉を帯び（二七八）蕃に之き、仁深く譽仰く、一方饒益すれば、千城注想す。覺花常に吐き、愍葉恒に春づ、誓いて調御（二七九）に將う、寧ぞ轉輪を求めん。爰に佛寶を脩すこと、此の東秦（二八〇）に於てし、項光（二八一）仍ち射し、眉相還た陳ぬ。雙樹影を結び（二八二）、三蓮耀を接し（二八三）、五道、光に含まれ（二八四）、十方、輝き眺らる（二八五）。果は奇特（二八六）と名づけ、是れ衆妙（二八七）と稱す、樂地（二八八）茲に在り、焉んぞ遠く召すを須めん。福の暨ほす所、寧ぞ専ら我が爲にせん、斯の含識をして、俱に妙果を圓かにせしめん。行きて嵐風（二八九）に値い、方いて劫火（二九〇）に逢うとも、空餘の勝績、騫くる無く墮つる無し。

【現代語譯】

急流は測りがたく、暗い海は果てしが無い。彼岸へと導く橋梁はかけられず、悟りへのともしびは誰が燃やすのか。一念一念はとどまることなく、一苦一苦もつらなる。生は稻光がめぐるようであり、滅も雲がめぐるより（その移り變わりが）甚だしい。古今の靈仙は一人ではない。（ある者は）龍に乗り、虎を駕し、空を飛び太陽を覆う。朝に玉の樓閣に登り夜には瓊玉の室宅に遊行しても最後には死んでしまふ。どうして假の存在と實體あるものを知るか。常住無我のたよりは佛にあるのであり、その行いは眞諦俗諦をおおい、名稱や言語を絶する。煩惱の峰は碎かれ、智慧の海邊は源に通ずる。佛の御姿は隠れてしまい、（その教説と實踐のみが多い）像法の時代である。英傑があり、一人だけ衆にぬきんでており、（それはあたかも）竹が千仞もあり、松が百丈もあるようである。鉉を帯びて青州に赴き、仁愛深く名聲がとどろき、一方に利益を施すと、千城が想いを注いだ。悟りの花はいつも咲き、慈悲の

葉はいつも芽吹き、誓って佛に請うのであり、どうして輪廻を求めようか。ここに、この東秦の地において佛寶を修するのであり、頭光は光を放ち、眉相もそなわった。娑羅雙樹下にて佛（像）は姿を現し、（無量壽、觀世音、大勢至の）三つの蓮華座は輝きを接している。五道が光につつまれ、十方に輝きが見られる。その果報は奇特（類い稀）と名づけられ、衆妙（あらゆる微妙なるもの）と稱される。安樂の地はここにあり、どうして遠くから呼び寄せることを求めようか。福の及ぶところはどことして自分だけにとどめようか、一切衆生みなともに佛果を圓滿成就させよう。毘藍風にあい、劫火に遭うとも空前絶後の優れた功績は缺けたり墮ちたりしないのである。

【語釋】

（二六八）【駛河】急流。煩惱のたとえ。（例）『涅槃經』德王品「云何菩薩觀此煩惱猶如大河。如彼駛河能漂香象、煩惱駛河亦復如是」[T12:501b]。

（二六九）【暗海】（例）『廣弘明集』卷一五 梁 王僧孺 懺悔禮佛文「茫茫有同暗海。幽幽實在危城」[T52:206c]。

（二七〇）【津梁】悟りの世界へと導く渡し場・橋梁。

（二七一）【終歸聚散】「聚散」は生死。（出典）『莊子』則陽「安危相易、禍福相生、緩急相摩、聚散以成」。成玄英疏「散則爲死、聚則爲生」。ここでは、靈仙でも結局は生死輪廻から抜け出すことができないことをいう。

（二七二）【假實】假の存在と實體あるもの。假名と實法など。（例）『大智度論』卷二三「世智者、名爲假智。聖人於實法中知、凡夫人但假名中知、以是故名假智。如棟梁椽壁名爲屋、但知是事、不知實義、是名世智」[T25:233c]。『成唯識論』卷八「依他起性有實有假、聚集相續分位性故、說爲假有、心心所色從緣生、故說

爲實有。若無實法、假法亦無、假依實因而施設故」。

(二七三)【眞俗】眞諦(第一義諦)と俗諦(世諦)。因縁によつて生じる事理を俗といい、不生不滅の理性を眞と
いう。(例)『大般涅槃經集解』卷一「寶亮敘曰、・・・若談眞俗、兩體本同。用不相乖。而闇去俗盡。僞謝
眞彰。朗然爲佛也」[T37:381a]。

(二七四)【名言】(出典)『尚書』大禹謨「名言茲在茲、允出茲在茲、惟帝念功」。孔傳「名言此事、必在此義」。

(二七五)【像法】釋迦の滅後佛教がいかに行われるかの時代區分である正像末三時説の像法。教説と實踐はあるが
證(さと)りはない時代。(例)『舊唐書』卷一 高祖紀 武徳九年條 詔「自覺王遷謝、像法流行、末代陵
遲、漸以虧濫」。

(二七六)【人英】俊傑、英傑。(例)『文子』上禮「明於天地之道、通於人情之理、大足以容衆、惠足以懷遠、智足
以知權、人英也」。

(二七七)【翹然】衆にぬきんでるさま。『新唐書』卷一一八 李渤傳「臣恐宰相羣臣蘊晦術略、啓沃有所未盡、使
陛下翹然思文武禹湯而不獲也」。

(二七八)【帶鉉】「鉉」は三公をいう。(例)『文選』卷四六 任昉 王文憲集序「皇朝軫憫、儲鉉傷情」。呂延濟注
「鉉、鼎耳也、謂三公也」。後述するが、正史の記述によると、天統五年二月に青州刺史として出向させる詔
が下され、天統五年三月婁定遠は司空となっている。なお『資治通鑑』では司空拜命を二月にかけている。

(二七九)【調御】佛の十號の一つ、調御丈夫の略稱。つまり佛のこと。(例)『藝文類聚』卷七七内典部下 寺碑
「梁簡文帝釋迦文佛像銘曰、至矣調御、行備智周、滿月爲面、青蓮在眸」。

- (二八〇)【東秦】(例)『晉書』卷一二七 載記 慕容德「青齊沃壤、號曰東秦」。
- (二八一)【頂光】項の圓光のこと。(例)『觀無量壽經』「次亦應觀觀世音菩薩。．．．頂有肉髻。頂有圓光。面各百千由旬。其圓光中有五百化佛、如釋迦牟尼。一一化佛有五百菩薩無量諸天、以爲侍者」[T12:343c]。
- (二八二)【雙樹結影】雙樹は娑羅雙樹。娑羅雙樹の下、佛(像)が姿を現したということか。ちなみに「雙樹滅影」は釋迦の入寂を指す。
- (二八三)【三連接耀】三座並んだ蓮華座に坐す阿彌陀・觀音・大勢至が皆光を放っている。(出典)『觀無量壽經』「次當想佛。．．．想彼佛者、先當想像。閉目開目見一寶像如閻浮檀金色、坐彼華上。像既坐已、心眼得開、了了分明、見極樂國七寶莊嚴寶地寶池寶樹行列、諸天寶縵彌覆樹上、衆寶羅網滿虛空中。見如此事、極令明了、如觀掌中。見此事已、復當更作一大蓮華在佛左邊。如前蓮華等無有異。復作一大蓮華在佛右邊。想一觀世音菩薩像坐左華座、亦放金光如前無異。想一大勢至菩薩像坐右華座。此想成時、佛菩薩像皆放妙光。其光金色照諸寶樹。一一樹下亦有三蓮華。諸蓮華上各有一佛二菩薩像、遍滿彼國」[T12:342a]。
- (二八四)【五道光含】(出典)『觀無量壽經』「次亦應觀觀世音菩薩。．．．舉身光中五道衆生一切色相皆於中現」[T12:343c]。五道は地獄・餓鬼・畜生・人・天道。
- (二八五)【十方輝眺】(例)『觀無量壽經』「次當更觀無量壽佛身相光明。．．．一一好中復有八萬四千光明。一一光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」[T12:343b]。
- (二八六)【奇特】(例)『長阿含經』卷一「諸賢比丘、唯無上尊爲最奇特」[T1:1b]。
- (二八七)【衆妙】(出典)『老子』第一章「玄之又玄、衆妙之門」。

(二八八)【樂地】(例)『世説新語』德行「王平子、胡毋彥國諸人、皆以任放爲達、或有裸體者。樂廣笑曰、名教中自有樂地、何爲乃爾也」。

(二八九)【嵐風】毘嵐風・毘藍風 (*Skt. Varimbhaka*)。劫末・劫初に吹き、至る處悉く破壊する暴風。(例)慧琳『一切經音義』卷一三「吠嵐僧伽、劫災時大猛風名也。此風狂暴、能壞世界」[T54:383b]。

(二九〇)【劫火】劫末に起る火災 (*Skt. kalpa-agni*)。(例)菩提流支譯『勝思惟梵天所問經』卷六「三千世界欲燒時、劫火將起、燒天地」[T15:92b]。

三、婁定遠の青州刺史就任の経緯について

この碑の主人公である臨淮王婁定遠は、『北史』卷五四婁昭傳(『北齊書』卷一五)は『北史』によって補ったもの)に附傳されており、東魏王朝の實質的創建者である高歡の妻の婁昭君の弟の婁昭の次子である。つまり、北齊の王室にとって外戚の關係にあたる。それだけでなく、婁昭は東魏王朝創設のために盡力し大きな功績をあげた功勞者でもある。ちなみに、婁昭の兄(拔)の子が婁叡である。¹³⁾

『北史』の傳の記述に、「少くして顯職を歴、外戚中偏えに武成の愛狎するところと爲り、臨淮郡王に別封さる」とあるように、婁定遠は、武成帝の寵愛を受け、若くして顯要な職を歴任した。具體的な官歴を挙げると、太上皇帝(武成帝)崩御時は領軍であり、さらに天統三年(五六七)閏六月に并省尚書左僕射から尚書左僕射となり、天統五年三月には、并省尚書令から司空となっている。¹⁴⁾

ただ、「武成大漸たるに、趙郡王等と同じく顧命を受け、司空に位す。趙郡王の和士開を黜けんと奏するに、定遠、其と謀る。遂に士開の賄賂を納れ、趙郡の禍を成す。其の貪鄙たること此くの如し」とあるように、この婁定遠は、趙郡王高叡らとともに和士開を排除しようとして画策したにもかかわらず、和士開の賄賂をうけ、趙郡王高叡が殺される禍を招いた張本人として、頗る正史の評価が低い。『北史』卷九二（『北齊書』卷五〇）和士開傳によると、和士開が後主と胡太后に謁見がかない、高叡を不臣の罪で斷罪し、婁定遠を青州刺史へと左遷させる詔を出すことに成功し、高叡は殺され、婁定遠は和士開から受け取った賄賂をすべて返しただけでなく、さらに賄賂を贈ったという。

正史本傳では、先に掲げた記事に續けて、「尋いで瀛州刺史に除せらる」と述べ、青州刺史のことには言及しない。しかし、瀛州刺史に任ぜられたことは臨淮王像碑に見えず、『資治通鑑考異』では、

北齊帝紀に「天統三年六月、并省尚左僕射婁定遠を以て尚書左僕射と爲す。五年二月、趙郡王叡を殺す。三月、并省尚書令婁定遠を以て司空と爲す」と。蓋し定遠既に僕射爲り、復た并省尚書令爲るなり。和士開傳を按ずるに、先に定遠を出だし、然る後に叡を殺す、叡の死は必ず定遠司空と作る後に在り、帝紀誤りなり。但だ果して何時に在るかを知らざるのみ。又た士開傳に云わく「出でて青州と爲る」と。定遠傳に云わく「尋いで瀛州に除せらる」と。蓋し先に出でて青州と爲り、後に乃ち瀛州に除せらるるなり。

と述べ、定遠は青州刺史の後、瀛州刺史となったとする。臨淮王像碑には「故に能く旗蓋を整え閭闔（みやこ）を辭し、筋鏡を節して營丘（青州）に下る」（一）内は筆者が補う）とあるので、中央の都から直接青州刺史へと赴任したと考えてよいだろう。つまり、婁定遠の青州刺史赴任の直接の原因は、和士開を中央から排除する計畫が失敗したことによるのであり、實質的には左遷といつてよい。

一方、臨淮王像碑は、當然のことながら、そのような事件については言及せず、青州がいかに優れた土地であるかということ、この地にかかわった歴代の有名人、すなわち、爽鳩、太公望、さらには三國時代の太史慈や王脩の逸話など、様々な典故を引用しつつ力説し、このような重要な州であるからこそ、「義は親重に歸す」、つまり、皇帝と外戚關係にあり、重んぜられていた婁定遠が選ばれたのだと強調している。北齊時代の青州刺史就任者を調べてみると、永安王高浚、漁陽王紹、平陽王高淹、清河王高勣、蘭陵王高長恭、韓裔、斛律平等が前任者におり、婁定遠の後は、任城王高潛、北平王高貞などがいるが、やはり、王室關係者が多く、「義は親重に歸す」という語が偽りではないことを裏付けることができる。

婁定遠の都での評價としては、碑文では、「管樂の小爲るを知り、元愷の大に非ざるを識る」などと、婁定遠と比較すれば管仲と樂毅、さらには、八元・八凱でさえもたいしたことはなく、婁定遠には劣ると述べる。さらに、「始めて金蟬を映ずれば、丁劉を漢日に鄙しみ、暫く鳩沼に栖まば、陳張を晉京に蔑む」と、後漢の丁鴻と劉愷、陳寔と張華といった名臣の名を挙げながら、彼らさえ婁定遠に比べてみると蔑まれるという。その婁定遠の青州刺史としての事跡を述べる碑文の十六行目から十九行目では、美辭麗句を列ね、州刺史として天下に美名を残した後漢の郭伋、賈琮、三國魏の梁習、賈逵などでさえも及ぶところではないと豪語する。以上のようにこの碑からは婁定遠の強烈な自負心を窺うことができる。これは、本来なら天下を動かす中央の顯職に就いているはずにもかかわらず、中央から左遷されてしまった自己の境遇に對する不満と表裏一體のものと言える。特に碑文ではかなり文字數を割いて青州がいかに天下に名だたる州であるかを力説しており、そうすることでこそ、左遷されたという事實を覆い隠すことができるのであろう。

最後に、定遠の死に少し言及しておこう。正史の傳によると、定遠は、以前、穆提婆が定遠の弟の伎妾を求めたのを拒否していたが、提婆は高思好が反亂を起こしたのにかこつけ、臨淮國郎中令に婁定遠が高思好とひそかに通じていると告發させた。後主は賄賂の罪で定遠を弾劾させ、定遠は變有りと疑って自殺した⁽¹⁵⁾という。高思好の反亂は『北齊書』後主紀によると武平五年二月であるので、定遠の死もこの年、つまり臨淮王像碑の完成から約一年後であるう。

四、青州佛教造像における尊像名の変化と臨淮王像碑

婁定遠の父、婁昭はその字が「菩薩」であること、父が早逝したため婁昭の下で養育された従兄弟の婁叡も字が「佛仁」で、寶山靈泉寺の高僧靈裕の外護の檀越として有名であり、寺には彼の名を刻んだ刻經碑が残されている⁽¹⁶⁾。このように婁定遠が佛教に親和的な環境で育ったことは確かであると想定できる。また、青州がこれ以前より佛教が盛んであったことは宿白氏が述べており、改めて繰り返すまでもないだろう。すなわち、臨淮王の造像を歓迎するような素地はこの地に十分にあったのである。

臨淮王像碑では、この世が輪廻轉生の世界であることを強調し、神仙であってもそこから抜け出すことができないことを述べ、あらゆる世界に数多く存在する佛こそが、そういった世界を越える力を有する者で人々をよく救済するものだと述べる。しかし、佛はすでにこの世にはおらず、自分こそが、その跡をついで清らかな教化を世に行う千年に一人の者だと主張するのである。このような記述は、ほぼ同時代の篤信の佛教徒として知られる趙郡王高叡の修寺

碑と比較すると、非常に大膽な表現であり、また師とする僧名が臨淮王像碑の方には全く見えないこともあわせて注意しておくべきことであろう。

碑文の後半部では、無常のこの世の中にあつて、常住の因を建てようとする、すなわち無量壽佛の造像を述べるのであり、人々の喜捨を得て、「无量壽像一區、高さ三丈九尺を制し、并びに觀世音・大勢至二大士」を造つたという。青州第一の南陽寺において造られた三丈九尺もの巨大な像であり、州の主立つた屬僚も参加したことが碑文には記されており、青州の官民間わずに大きなインパクトを與えたと思われるが、盧舍那や釋迦や彌勒ではなく、無量壽三尊像が選ばれたのは特筆すべきことである。

なぜなら青州龍興寺址出土北朝造像においては、無量壽の尊名を有する銘はなく、範圍を廣げて現山東省の領域の北朝時代の有紀年造像銘を筆者の収集した造像記について調べても、盧舍那像が三十件と最も多く、彌勒、觀音とつづき、無量壽はそれらよりも少ない。特に臨淮王像碑以前の山東地域において無量壽の名が見える有紀年造像銘は、現在筆者が調査した中では、もと諸城にあつたという天統五年（五六九）の造像記に「弟子張・敬造无量壽像一・・」とあるもの⁽²¹⁾、青州の西劉鎮にあつたという武平三年（五七二）の造像記に「禪窟寺□□敬造□世音菩薩□□。仰爲皇帝□□臣僚百官□□父母一切□□□□之類□□□福、生生□世、共一切衆□□无量壽佛」というもの⁽²²⁾だけである。臨淮王像碑完成の武平四年（五七三）の後には、武平五年の「佛弟子淳于元皓、爲亡弟雙皓、敬造无量壽像一軀并二菩薩」⁽²³⁾、承光元年（五七七）「佛弟子張思文、敬造无量壽像一軀并觀音大勢至」⁽²⁴⁾と、無量壽三尊像を造つたことを明記する造像記があらわれる。

事實、隋代の有紀年銘造像のなかで、隋代になつてもなお「阿彌陀」ではなく、「無量壽」の名を主尊の像に用い

ているのは、青州の雲門山の造像にほぼ限られている。⁽²⁵⁾ 隋代では、盧舍那像の造像は山東地方では有紀年銘像で見ると、突然見えなくなってしまうのであり、この婁定遠による無量壽三尊像の完成が晝期となった可能性も想定できる。

もうひとつ注目すべきは、この碑文には『觀無量壽經』(以下『觀經』と略)からとられた表現が多用されていることである。語釋を参照すればわかるように「三心」、「百寶」、「豪如五嶺之旋、即之便觀。目似四溟之潔、驗之猶在」、「毗楞寶冠、帶左而馳耀」、「鉢摩肉髻、右而飛光」、さらに銘の「三連接耀、五道光含、十方輝眺」という箇所についても、みな『觀經』に典據を有する語である。これだけ多くの語が『觀經』に依據しているというのは北朝期の造像記にあつては他に類例を見ない。臨淮王が有していた豊富な資金を投じて、これら『觀經』に説かれる佛菩薩の圖像的特徴を表現する精美な裝飾を施された像がつくられたことが想像できる。「豪如五嶺之旋」、「目似四溟之潔」という箇所については、兗州泗河で発見された阿彌陀三尊造像記や、舜禪師造阿彌陀三尊像記にも類似表現が見られる。『觀經』の圖像イメージが重視され、『觀經』の流布と阿彌陀三尊像の流布が同時並行的に行われたことがうかがえる。

おわりに

本稿では臨淮王像碑の譯注の作成を試み、初歩的な考察を加えた。まず、臨淮王は中央から直接青州刺史に赴任したことが碑文によって再確認された。また碑文から婁定遠の強固な自負心を読み取ることができ、それは青州刺史に

左遷された経緯と関係しているであろう可能性を指摘した。臨淮王像碑は『觀經』に典據を有する語が多く、臨淮王の發願によつて造られたこの無量壽三尊像が、青州佛教において造像の流行が盧舍那から無量壽・阿彌陀へと變化する畫期となつた可能性を指摘した。

以上非常に簡潔で淺薄な分析ではあるが、この碑の有する意義について現時點で筆者が考えたことを述べた。譯注ではいまだ典據不明なところもあり、誤りを多々犯していることを恐れるが、諸賢の御批正をいただければ幸いである。また、青州地方の造像銘を網羅的に収集して分析し、また、他の地域の長文の造像銘と比較することにより、さらに詳しくこの碑の特徴、ひいてはこの地域の佛教のあり方を明らかにできると考えられる。今後更に究明していきたい。

- 1 最新の成果である、高橋繼男（編）『中國石刻關係圖書目錄（1949—2007）』汲古書院、二〇〇九年を紐解けば、いかにその數が多いかが一目瞭然である。
- 2 代表的なものとして、劉長東『晉唐彌陀淨土信仰研究』巴蜀書社、二〇〇〇年、一七七—一七八頁がある。
- 3 青州市博物館「青州龍興寺佛教造像窖藏清理簡報」『文物』一九九八—二。
- 4 宿白「青州城考略——青州城與龍興寺之一」『文物』一九九八—八、「龍興寺沿革——青州城與龍興寺之二」『文物』一九九八—九、「青州龍興寺窖藏所出佛像的幾個問題——青州城與龍興寺之三」『文物』一九九九—一〇。
- 5 朱正昌（主編）『碑刻造像』（山東文物叢書一〇）山東友誼出版社、二〇〇二年、一六八頁。
- 6 大村西崖「支那美術史彫塑篇」佛書刊行會圖像部、一九一五年。
- 7 常盤大定・關野貞（共著）『支那佛教史蹟』佛教史蹟研究會一九二七—二八年。同じ著者による『中國文化史蹟』法藏館、

一九七五—七六年にも収録される。

- 8 北京魯迅博物館・上海魯迅紀念館(編)『魯迅輯校石刻手稿』上海書畫出版社、一九八七年。
- 9 顏娟英(主編)『北朝佛教石刻拓片百品』中央研究院歷史語言研究所、二〇〇八年。
- 10 毛遠明(編著)『漢魏六朝碑刻校注』綏裝書局、二〇〇九年。
- 11 藤原楚水『譯註語石』省心書房、一九七五年。
- 12 北京圖書館金石組(編)『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』中州古籍出版社、一九八九—九一年。
- 13 婁叡と婁定遠とは従兄弟の關係にあたる。婁叡はその墳墓が発見され、大量の出土品とともに、鮮やかな壁畫が残されていることで有名である。この婁叡は父が早くに亡くなったため、婁昭が養育した。
- 14 『北齊書』後主帝紀では天統五年三月としているが、後述の『資治通鑑考異』の記事では、婁定遠の司空拜命は同年二月の趙郡王高叡の殺害前と考えられるとして、この帝紀の三月というのは誤りであるとしている。しかし、太尉の趙郡王高叡が殺害されたことで太尉が空位となったので、司空の徐顯秀が太尉となり、婁定遠が司空となったと考えた方がよいだろう。ただし、碑文二七行目には「鉉を帶び蕃に之¹⁰き」とあり、鉉は三公を指すと考えられるので、司空の位を帯びて青州へと出向したようである。『資治通鑑』のように二月である可能性も否定できない。
- 15 『北史』卷五四 婁昭傳附婁定遠傳(『北齊書』卷一五も同じ)「初定遠弟季略、穆提婆求其伎妾、定遠不許。因高思好作亂、提婆令臨淮國郎中令告定遠陰與思好通。後主令開府段暢率三千騎掩之、令侍御史趙秀通至州、以贓貨事劾定遠。定遠疑有變、遂縊而死。」
- 16 『八瓊室金石補正』卷二一、張總「石刻佛經中的新發現與新解讀」(榮新江・李孝聰(主編)『中外關係史——新史料與新問題』科學出版社、二〇〇四年、二〇五—二二四頁)。
- 17 前掲注四の一連の論考を参照。

- 18 『拓』七卷六一頁。『百品』一五二頁。『魯』第一帙第六册九六五頁。
- 19 北朝・隋代の無量壽及び阿彌陀の尊名を有する造像記については、筆者は別稿にて詳論する豫定である。なお阿彌陀像については、「北朝造像銘にみる禪師と阿彌陀信仰——「無量壽」から「阿彌陀」への尊名の變化に關連して」『印度學佛敎學研究』五七一一、二〇〇八年において簡略ながら言及した。
- 20 北朝時代における盧舍那像の造像銘については、顏娟英「北朝華嚴經造像的省思」（邢義田（主編）『中世紀以前的地域文化・宗教與藝術』中央研究院歷史語言研究所、二〇〇二年）がリストを提示している。ただし部分的には修正を要する。
- 21 『八瓊室金石補正』卷二二。
- 22 『益都縣圖志』卷二六。
- 23 『拓』八卷五六頁、大村西崖『支那美術史彫塑篇』三五二頁。
- 24 『拓』八卷八三頁、『八瓊室金石補正』卷二二、『魯』第二帙第四册九〇七頁。
- 25 この事實についても稿を改めて詳論したい。
- 26 樊英民「兗州發現北齊造像記」『文物』一九九六一三。
- 27 『拓』八卷一五頁、『百品』二三六頁。

北齊臨淮王像碑的試譯和初步考察

倉 本 尚 德

北齊武平四年(573)建立的臨淮王像碑，高 444、寬 160、厚 19 厘米，是代表北朝時代的石刻之一。臨淮王就是東魏王朝的實質建國者高歡妻婁昭君的弟弟婁昭的次子婁定遠。婁定遠和婁叡是堂兄弟。臨淮王像碑是爲了紀念他建造無量壽三尊像而建立的。此碑原來所在地是當時青州第一寺廟的南陽寺(龍興寺)。1996 年從龍興寺原址出土大量精美的北朝佛像，龍興寺因而聞名于世。

此次筆者試着對全碑文進行了譯注，然後再加以初步分析。首先，根據碑文確認了他從中央直接調到青州刺史，武平四年還沒調到瀛州刺史這箇事實。從碑文中可以看出他有強烈的自負心，這很可能跟他被左遷青州，心懷不滿的經歷有關。

其次，臨淮王像碑文有很多詞出自《觀無量壽經》，不像其它一般北朝造像記。這些詞大多表現了三尊圖像的特徵，臨淮王捐出大量的資金，制造了精美的造像，給青州吏民留下深刻的印象。臨淮王所造無量壽三尊像，有可能成爲從以盧舍那爲中心到以無量壽(或者阿彌陀)爲中心造像的轉折點。